

---

# 変・人

雨宮柳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

変・人

### 【Nコード】

N0836B

### 【作者名】

雨宮柳

### 【あらすじ】

上流階級が生徒の大半を占める私立白崎学園。そこにいる二人の生徒。一人は学校中の人気者、一人はからかわれ者。だが、二人には秘密があったのだった――

## FILE 1：THE特殊部隊

物音一つない漆黒の闇。昼間の喧騒は消え、街は脱け殻になったしまったようだ。

その街の一角。林立するビルの中、飛び出たようにそびえる巨大な建物の中。最上階、社長室に一つの人影が動いていた。

人影はしばらく、引き出しを下から順に開けたり、並べられた本と本の間を調べたりとしていたが、やがて机の下を覗いたまま動きを止めた。

「これ：か？」

机の下の一番禺。上から突き出たボタンを押し込む。ガコンツと音がすると同時に、先程調べていた部屋の端にある本棚が少し奥に押し込まれ、左へとスライドする。

「金持ちってのはどうしてこうゆう仕掛けが好きなのかねえ」

人影はため息混じりに近づく。どうやら暗視ゴーグルを着けているようで、視界に問題はないらしい。

現れた金庫のダイヤルを回し、いとも簡単に開ける。中にはICチップと書類の入った封筒が入っていた。

「任務完了：っ」と

二つを手に取り、後ろ手に金庫を閉めた。

それがまずかった。金庫の扉は思いの外軽く、閉まると同時に大きな音が社長室に鳴り響いた。

ジリリリリッツツ！！

刹那、耳障りな音が鳴りだすと同時に部屋の明かり——否、ビル全体の明かりが点灯した。そのビルだけ、まるで昼間のようだ。

「っ！？しまった！！」

ドカドカと警備員の廊下を走る音が近づいてくる。

すでに廊下に退路はない——そう判断して窓へと走りだす。

開け放った窓の下は地上までおよそ100メートル。

脇腹のチャックを開け、中から手にすっぽりと収まる程のリールの形をした物を取り出す。

飛び出ているフックはワイヤーが取り付けられ、どうやらワイヤーが巻かれているようだ。

窓のサッシにフックをかけ、スイッチを押すとさらにフックから太い針が突き出てサッシを貫通させ、壁まで突き刺す。

一度強く引いて強度を確認し、迷いなく窓の外へと跳ぶ。同時に警備員が部屋へと飛び込んできた。

壁を蹴りつつ下へと一気に降りていく。その下にはトラックが走っている。

一際強く壁を蹴り、別のスイッチを押す。フックが爆発し、ワイヤーがリールに巻き込まれ始めた。

体が宙に投げ出される。その体は――トラックの荷台へと落ちていった。

警備員が見下ろしたときには、すでにトラックが走り去ったあとだった。

「70点だな」

「ですね」

「何でだよ！任務はちゃんとこなしたし、顔は見られなかっただろ！！」

「そんな初歩的なことで威張るな…というかそんなことになったら、訓練費全額帰せと国から請求書くるぞ」

「そんなもの、握り潰せば問題ないさ」

「よけい問題だ……」

ここは私立白崎学園。比較的に上流に近い中流階級の生徒と、本物の上流階級者の通う、学園である。

小等部・中等部・高等部と、それぞれに屋上付き5階建て校舎が当

てられてある。基本的にエスカレーター式なのでのんびりしたもので、願書さえ出せば無条件で付属大学校への進学も可能である。

まさに、お坊っちゃまとお嬢様のためにある、日本唯一の最高峰学園である。

付け加えれば、構内の気軽さも他に比べて最高峰だ。貴族階級に生まれただけひび通いたい学園だろう。

そんな学園の、理事長室。理事長と、本校の制服を着た二人の生徒が、話していた。

普通、理事長などに対してため語を使うはずないのだが、気にする事無く二人はしゃべっている。

「まあ、今回は成功したから不問に処すが」

「もう十二分に文句垂れたような気が…」

「黙れ。通常ならば減俸程度でもすまない問題なんだ。少しは隊員らしく上官を敬ってやれよ」

「…お前も大概敬ってないけどな」

二人の会話を聞きながら、理事長は深くため息を吐く。

彼らは第7特殊部隊所属の隊員である。と言えど、この二人だけの構成なのだが。

先日ビルへと侵入した生徒が岩下結城、副隊長だ。いわしたゆうき

次いで先程から結城を嗜めるように喋るのが柄沢浚、隊長を務める。からさわしゅん

そして、現在口論を続ける二人を前に、頭を痛めている理事長。木き

田敏一、28歳にして二人の司令役を務める、将来有望視される若

き中佐である。

だが、有望視される故にこの二人の司令役を担うことになった彼は悲惨と言っても過言ではない。

彼らは特殊部隊中でも外れ者で、他の隊から爪弾きにされた。しかし、その能力は並外れたものを持ち、その結果たった二人という前代未聞の部隊構成に至った。

外れ者というだけあり、例え上の命であろうと間違っていると思っただことには反発し、意味がないと感じれば勝手に別行動を取る。そ

の高い能力がなければ、まずクビになるほうが早かったはずだ。  
特に能力では浚が全体的に高評価なのだが、実動にあたっての勘は  
結城がいいという。

正確に言えば、浚は人当たり良くしているのだが、つるんでいる結  
城が気に入らないと反発するため、浚は巻き添えを食っているだけ  
なのである。事実、いくつも引き拔きの声が上がっている。

二人の口論はまだ続いていた。

結城は浚を指差して叫ぶように抗議の声をあげた。

「大体な！俺には不満の点が多すぎるんだよ！！例えば……」  
コンコン

軽くノックの音が部屋に響く。瞬間、三人は身の振りを変えた。

5秒ほど経ち、女生徒が扉を開けた。

「失礼します……っ！浚様！？」

入ってきた女生徒は、浚を見るなり身を堅くした。浚は結城を嗜め  
ていた時と打って変わり、やわらかな声で話し掛けた。

「こんにちは、理事長へのご用事ですか？」

「あ、はいっ」

「ごくろうさま」

優しく、にっこりと微笑む浚。女生徒は顔を真っ赤にして頭を下げ、  
理事長の前へと向かおうとする。

そこへ、結城が横からにゅり、という音がしそうなほどなめらか  
に出てきた。いつのまにか、眼鏡を掛けている。しかも、いわゆる  
ビン底眼鏡といわれるアレだ。

「お疲れさまですー」

クイクイツと眼鏡のつるをあげながら女生徒に声をかける。とたん、  
彼女は露骨に嫌な顔をして吐き捨てるように答える。

「あんた、いたの？さっさと自分の教室に行ったらどうかしら？」

理事長に書類を渡して、さっさと部屋を出ていく女生徒。その際も  
浚へのあいさつだけはすっかり忘れていなかった。

気配が消えたのを確認してから、ため息混じりに結城は眼鏡を外し

た。

「これ……だ」

「まあ、わからなくてもいいがな」

彼らの基本任務は学園生徒の安全を守ることである。そのためには内部から知っていかなくては分からないことも出てくる。よって、互いに正反対の――つまり人気者と嫌われを演じ、内情を調査することになった。

「何で俺が嫌われ者の役なんだよ!？」

「元々人付き合いが苦手なやつに、人気者の役なんてやらせてみる。いつかボロが出て失敗に終わるだけだ」

「それくらいにしとけ……」

さらに続きそうな口論に歯止めをかけたのは、今まで傍観していた敏一だった。

二人も口論という名の口喧嘩を止め、敏一理事長の言葉を待った。

「とにかくも、二人ともご苦労だった。転向してきてまだ二ヵ月あまり。成果としては立派なものだ」

彼の言うことは確かだ。

二ヵ月あまりで人気の転校生と嫌われ者の転校生を演じ、その傍らで先日の侵入および重要気密書類の奪取をこなしてみせた。

その能力は、厳しく見ようと秀でているのは明らかだ。

「今後は学園周りも警戒にあたれとお達しだ。しっかりとな」

『ありがとうございます!』

軍人らしく、敬礼をする二人。しかし真面目に見えて、やはりどこか抜けている。理事長は側頭部に痛みが走るのを感じた。

情報収集は主に浚の役目である。

集めた情報を結城に渡し、読み終えたところで二人は近くのファミレスへ立ち寄り、計画を立て始めた。

「浚の集めた情報だと、痴漢とか強盗とか結構見かけるんだけど……」

…」

手元に置いてあった書類の束の中から、一枚を引っ張りだして提示した。

「この通り魔事件がまず片付けたほうが良さそうだと思う」

通り魔事件——最近部活動などで下校の遅くなる生徒が、突然何者かに教われるという事件が多発しているらしい。被害者は入院しているにも関わらず、何も覚えていないという。今回の事件の明確性が出たのも、通行人が現場を見たことによるものだった。すでに被害は十数人に及んでいる。

「犯人はその一時の記憶を確実に飛ばしている。よほど訓練されているのだろうか」

「けど、俺たちが適わないわけないだろう」

「そうなんだろうけどな…」

「…何か気になる点があるのか？」

浚が計画中に曖昧な反応をする時は引っ掛かる点がある証拠だ。浚とは物心ついた時からの付き合いであるため、些細な変化で気付くことがある。

1分ほど経ち、まとまったのか浚は口を開いた。

「まず、一般人かどうかという点がある。意図的に記憶を飛ばすというのは、プロでも失敗する可能性の技だ。それを十数人に対して一度の失敗もない。よほどの訓練をしていなければ殺すほうが、よほど楽だ」

結城は無言で頷き、後を促す。

「もう一つは…被害者の患部がおかしい」

「おかしい？」

「正確には…丁寧すぎるんだ。全員腕部や脚部を骨折しているのは知っているな？その骨折部位が、きれいに折られすぎてる」

どういうことだ？と結城が尋ねると、大きくため息を吐き、答えた。  
「体術専門なら察しろよ。…折れた骨は付くんだが、ほとんどは歪



な形になってしまう。原因に大体が衝撃によるものだから、当然碎けるように折れているからな。今回の事件も、目撃証言に長い鈍器らしき物があげられている」

一息ついて、さらに続ける。

「だが、被害者全員の骨折は、付いたときに完全な元どおりになるような折られ方をしているらしい。：鈍器による鋭い衝撃の加え方を習ったよな？」

「ああ、微妙な力加減が必要なやつだろ？覚えるのにかなり苦労した」

浚は満足気に頷き、水に口を付ける。

「戦闘術のセンスが卓越しているお前ですら苦労した代物だ。一朝一夕でやられたらたまらない」

「ってことは：並み外れた強さを持ったやつだと」

浚は頷く。結城はしばらく考える仕草をしていたが、コップの残りの水を流し込み、一息ついた。

「まあ、考えても始まらないだろ。その時に考えればいいさ」

「そうだな。頼りにしてるぜ。せめてそうゆう点だけは」

「一言多いよ浚ちゃん」

戯れるように話ながら、二人は今夜からの巡回を決定した。

### 巡回3日目。

これまで通り魔は現われていない。代わりに、副産物のように痴漢や強盗をことごとく捕まえていた。

だが、本命は未だ見つかっていない。今まで3日以内には現われているにも関わらず、姿すら見せていない。もし痴漢や強盗の存在がなければ、結城を根気よく続けさせることはできなかっただろう。そういう意味では、痴漢と強盗には感謝かもしれない。

『：なあ浚』

不意に浚のイヤホンに結城の声が届いた。早い情報交換のために小

型無線を使っている。懷からピンマイクを取出し、スイッチを入れて答える。

「なんだ？」

『暑い』

「我慢しろ」

結城が不満を言うのも無理はない。

何せTシャツでいても暑い、夏の夜だ。そんな中、彼はマ○リックス的サングラスに、黒いジャケットを着込んでいる。

当然理由はある。まず一つ目は防御性を考えて。二つ目はサングラスが暗視スコープの役割を果たし、暗闇の戦闘を有利にするため。もっとも、そんな訓練は既に経験済みで、結局気休め程度の効果しか持たないが。

そして三つ目は：〈岩下結城〉のキャラクターを保持するためだ。結城が学園に築いた岩下結城像は〈勉強は結構できて、スポーツがダメダメな変態メガネ野郎〉だ。つまり、事件解決から最も遠いであろう人物。知られたら、現在の地位から自ずと押し上げられ、当初の計画から外れてしまうだろう。それだけは避けなければならなかった。一分間ほど浚が悩んで決定した。八割方遊んでいるのだろうが、特にサングラスとかは。

ともかく、闇夜のヒーローの正体を知られることはなくなった。はぎ取られればそれまでだが、結城が易々とやられると浚は思っていない。それほどに、信頼感は確かであった。

『まあ作戦だから文句は言わないようにするけどさ：そろそろ出てきてもいいんじゃないか？』

「確かにな。俺の予想でも今夜中には：。：結城」『さすが浚様。すばらしい頭をお持ちだ』

サテライトシステムを利用した周囲の物体を示すレーダーを見たまま浚は呟くように結城の名を呼んだ。

そこには半径1キロの地図が鮮明に映し出されていた。

地図上では無数の点が光ったまま動き、国道や商店街に集中していることから、それが人であるとわかる。

結城を示す光の北へ2、300メートル進んだ辺りで、校門から出た光を追うようにもう一つの光が近づいていくのが映し出されている。

友人と考えるにはおかしい距離の開け方。浚は位置を結城に示し、動きだしたのを確認すると自分もポイントへと急いだ。

すっかり日が落ち、街灯の光以外辺りを照らすものはなくなっていた。

その街灯も、最近現われた質の悪い暴走族が何度も壊していくため、修理されていない箇所がいくつもあった。その中、部活を終え家路を急ぐ少女が一人。最近は通り魔が横行しているらしく、早くに帰ることを心がけていたのだが、今日に限って片付けが長引いてしまった。彼女以外はみんな、自家用車の高級車で迎えが来たが、一般人の彼女だけは徒歩なのだ。

「（いやだなあ……今度から自転車にしようっと）」

足を早める少女。その後ろから、歩調を早め歩幅を使い、徐々に距離を縮める男がいた。

夏にも関わらず着ている長袖のシャツの右腕の部分が、不自然に丸く堅いものが入っているように見える。

距離が5メートルにまで縮まった。ゆっくりとした動作で右手を少し動かすと、長袖の下に隠していた鉄パイプが姿を現した。握りにはグリップテープまで巻かれ、本来の目的外の使用を明らかにしている。

歩調と歩幅が急に変化した。足音を殺し、少女がこの通りで全くの闇に入る瞬間を狙って近づく。残り2メートル。男は右手を大きく振り上げた。

刹那、後ろから声が飛んだ。

「女の子を後ろから襲うなんて、男として恥ずかしくないか？」

「っ!？」

振り返る男。その目に、低く跳躍し右手のトンファーを振り下ろしにかかる影が映った。反射的に鉄パイプを横にかまえ、受けにかかる瞬間一髪で衝撃を受けとめた。

影は地に足を着くと同時に爪先で地面を蹴り、すれ違いざま左手のトンファーで脇腹を狙う。男は体を横にし、掠めつつもどうにか躲す。

「きゃっ!？」

影は速度を殺さず、少女を抱えて一気に男との距離を離れた。

「大丈夫か？」

「えっ…あっ…はい……」

影は少女に声をかけて下へ降ろす。

「危ないからそこで大人しくしてろよ」

そう言ってトンファーを構える。

「……」

男は無言で見ている。いや、正確には無言ではない。口が発音せずパクパクと動いている。

その意味をとらえ、結城は解読する。

「合格だ……? どういうことだよ!？」

男はにやりと口の片端をあげ、身を返して闇夜の中へと消えていった。

結城はすぐにピンマイクに問い掛ける。

「追うか？」

『いや、いい。深追いして捕まる相手じゃないんだろ?』

「さすがだな…そこまで察するとは」

『今日のところはこれで引き替えそう。例の場所で』

「了解」

ピンマイクのスイッチを切り、少女へと向き直した。

「今後は夜道を一人出歩かないように。気を付けな」

「あっ：はい、すみません：」

「じゃあ俺はこれで」

「あのっ！」

きびすを返そうとした時、彼女が呼び止めた。

「名前：教えてくれませんか？」

よほど恐かったのか、涙目で尋ねてくる少女。しばし考えたあげく、偽名を使うことにした。

「：神谷堅だ」

結城は若干自分に酔い痴れながら夜気の中を駆け抜けていった。

「バツツツカか！てめえはあ！！」

びりびりと理事長室を震わす、木田理事長の声。防音室になっていなければ、外まではっきり聞こえたことだろう。

「いいだろ、どうせ偽名なんだし」

さらりと言い返す結城。浚はとりあえず横で傍観している。

木田理事長は一際大きくため息を吐いた。

「お前が偽名を使っただけならな。問題は使われた側だ」

「は？」

いまいちその意味がわからず、結城は首を傾げた。

「構内に行ってみればよくわかる」

「ねえねえ聞いた！？最近この辺りで噂の正義の味方！神谷堅って言うんだって！！」

「聞いた聞いた！カッコイイわよねえ、助けてそのまま去っていく…憧れるわあ：」

「でも意外と中身はどうしようもない顔かもよく？そんなどこの馬の骨かわからない人想うより、現実にいる浚様のほうが断然いいっ

て！」

「馬の骨とは失礼ね！素顔もカッコイイに決まってるじゃない！！」  
構内をぐるりと一周している最中、高等部を中心に中等部、一部は  
小等部まで女子の間で話題となっていた。おそらく、今後は現実の  
柄沢浚か、理想の神谷堅かで意見が分かれるだろう。

「……どう落とし前つける？神谷くん」

「嫌味だろ、それ……」

結城はどうしたものかと茫然としている。横から浚の深いため息が  
聞こえてきた。

## **FILE 1: THE 特殊部隊 (後書き)**

なかなか無理矢理な点があると思いますが、想像力MAXでお付き合いください。これから二人の学園生活が混じってきます。コメデイも豊富になる(予定)です。どうぞよろしく

## FILE 2：束の間の日常

ガンガンと響く音を消そうともせず、警察の一団が古びたマンションの、白いペンキが剥げた階段を駆け上がる。

一団はマンション2階、一室の扉の前で止まった。

先頭を切って刑事がドアを押し破るように開け、手に警察手帳を掲げて踏み入った。後から数名が続く。

中には昼食をとっている男性と、その娘らしき学生服を着た少女が座っていた。

「警察だ！中島則夫、殺人の容疑で逮捕する！！」

「なっ…何のことだ！私は何もやっていないぞ！！」

「話は署のほうで聞こうか」

逮捕状を内ポケットから取出し、刑事が周りの者に連行の指示を出す。

警察は両腕を押さえ付け、中島を連れていく。

中島は必死で抵抗しながらわめき、傍観していた娘へと助けを求めた。

「美代！頼む、お前なら俺が何もしていないと分かるだろう！！」

叫ぶ男を見て、少女はゆっくりと歩み寄った。なぜか取り押さえていた警察も、その足取りを見て凍り付いたように止まっていた。

おもむろに中島の肩に手を置き、娘は静かに口を開いた。

「見苦しいよ、お父さん。大人しく出頭しなさい」

「…何見てるんだ？」

「ん？『娘の裏切り・男と娘と殺人と』」

「朝からそんなB級見てるなよ…」

浚はリモコンを手に取ると、チャンネルを操作した。

固まっていた男がようやく動きだし、慌てて喋ろうとした瞬間に、



今度は国会中継が映し出される。

「あっ！何すんだよ！？これからいいトコなのに！！」

「昼ドラ観るためにわざわざ屋上まで線引いてる訳じゃないんだぞ。しかもビデオだろ、これ。情報収集も仕事のうちだ、しっかりやるとけよ」

屋上の給水タンクの下に作られた隠し部屋。広さは12畳に及び、防音防水の他、様々な設備が整えられている。

テレビの配線もまたその一つで、本来の目的は情報収集のため。なのだが、頻度としてはドラマやバラエティを映していることのほうが、圧倒的に多い。

結城など少し目を離せば、まずドラマを観ていたりする。

「くそお…いつか過剰労働で訴えてやる…」

「裁判で認めてもらえくらい働いてから訴訟起こせよ」

「…はい、すみません」

二人のやりとりの間に、各機関の代表による報告が終了した。

近年で第3次世界大戦の色が、次第に濃くなりつつあった。そのためか、週に1度は国会が開かれ、その模様が全日本に生中継されるようになっていく。学校によってはその間授業を中断し、聴かせているところもあるらしい。

次に目付きの鋭い男性が登った。一つ咳払いをし、口を開く。

「――報告のように、私たちの情勢は次第に悪化する傾向にある。

その一端に、外国に対する日本の立場の弱さを挙げたい。敗戦国である私たちの国は、アメリカやヨーロッパ諸国。その他、勝戦国に対して発言力が弱い。そのため、これまで不利な条件を付けられ続け、常に私たちは切迫した状態に居続けた。これは、日和見な態度を続けたことによる皺寄せだ。私たちはこの状況を、打破しなければならぬ。そして、私たちにはその力がある。今こそ、日本が、世界に、その力を示すときなのだ！」

男は強く握った右拳を掲げ、強い言葉で締め括った。

「…何か演説みたいな発言だったな。つか、今のおっさん誰だ？」

自席へと戻る男を眺めながら、結城は浚に尋ねた。

「：今日お前を呼んだのは、そうゆう意味でも正解だったみたいだな…」

眉間を押さえながらため息を吐く浚。発言席上では、同じ思想を持っているらしい男性が、先刻の男性の発言を持ち上げるように熱弁している。

「鷹派：は、わかるな？」

「断固戦争主張の一派のことだろう？」

すぐに答えた結城にほっとしながら、浚は頷いた。

「そうだ。そして彼はその鷹派の代表者、片瀬統智だ」  
かたせとむち

現在の世界情勢は、第3次世界大戦へ歩みを進めている状況である。まず小競り合いが起き始めたのは、中東だった。石油資源の減少に伴い、商人は石油資源の独占を始めた。それにより、石油の価格が高騰し、耐え切れなくなった市民から、小規模テロが勃発した。

それに乗じたように、アメリカが取引を開始。かなりアメリカにとって有利な条件にされていたところを考えると、脅しに近いことがあったのかもしれないが、詳細は知れない。

アメリカの介入も、テロ活動の思想に程よくスパイスを加え、さらにテロは激化。終盤は、戦争といっても差し支えないものだった。現在は国連の仲裁が入り、一時休戦となってはいるものの、一触即発の感は否めない。

鷹派の主張は、この機会に乗じて日本の順位をあげるべきだというものである。そして、必要なのは戦争であり勝たなければ上位になることはないと言う。

だが、一般市民にしてみれば、戦争を起こされて被害を被るのは自分達なのだ。政治に対する関心の薄い日本人も、さすがにそこは認めない。加えて、世界順位など気にしていないのだ。市民にとって大切なのは日常生活であり、平和であれば何ら問題ないのだ。

そのため、未だ鷹派の主張は通らず、鳩派——戦争反対派——の比率が3：2で有利といったところである。しかし、いつ返るかわか

らないのも事実だ。この近郊状態も、近いうちに崩れるだろうと予想されている。

「戦争なんかやっても、ろくなことが無いって解らないのかねえ。上は指示すりゃいいから楽だけど、前線はたまったもんじゃないんだぜ」

「まあな。ただ、鷹派の考えもわかる。事実日本は、日和見で温和に通そうとして失敗を繰り返し、他国の反感を買ってきた。多少革新じみたことが必要かもしれない。ただ：戦争すれば何とかなるって考えは、少し短絡的すぎる気もするけどな」

「俺はそこまでわからん。戦争は辛いことしかないってだけだ」

「それも一つの立派な考えさ」

映像は3人目の発言者を映し出している。発言内容は多少言葉筋を変えているだけで、大きく違いはない。鷹派が活発化したのはつい最近になってからだ。まだ世間を丸め込む具体案は確立されていないのだろう。

浚はテレビの主電源を落とすと、部屋の隅に掛かったハシゴに手をかけた。外との行き来にはこのハシゴが使われている。他にすり台のように下まで続く通路がある。しかし、人の有無の確認ができないのと、坂が急でかなり速度が出て恐ろしく、二人に敬遠されていて近ごろの出番はない。

「そろそろ生徒の登校時間だ。見つかるやっかいだから屋上を出るぞ」

人気者の浚と、変わり者の結城が朝早くに屋上で会っていたなど知れたら、どんな噂が広まることか。それこそ、全校生徒の記憶を飛ばさなければならぬ事態になりかねない。

「そだな。――やれやれ：またオタクのフリしないといけねえのか  
：」

「給料差っ引かれたければ、今すぐやめてもいいけどな」

「差っ引く、じゃなくて全額取り上げだろ。大丈夫、やれるよ」

「ああ、頑張ってくれよ」

諦めて言う結城に素直な笑みを浮かべた。浚はハッチ横の天井に取り付けられた、監視カメラの映像を確認してハッチを開ける。

とたん、頭上に青い空が広がった。薄雲が青に白い筋を引きながら、ゆったりと動く。

給水タンクの横に立ち、空を見上げていると、結城が下から昇ってきた。ハッチを締め適当に足で砂埃を被せると、開閉された跡は見られなくなった。調べればすぐわかるのだろうが、屋上の裏にある給水タンクまで来る者はいない。ここは上流階級の学校。その点は感謝である。

結城は屋上の表へと回り、校門を見下ろす。5階建てのため、下から見ても誰かはわからないだろう。浚は結城の横に立ち、結城になるう。

1時間以上前にも関わらず、ちらほらと生徒の姿が見えた。数人の生徒の横に見られる大人は、執事の類だろうか。

「さくてと：また忙しくなるな」

大きく伸びをして、結城は言った。

「そうだな。まあ、気張らずに精一杯いくか」

「おうっ」

二人はこぶしを軽くぶつけ合った。

「――あの俳優カッコイイわよね。ほら、昨日のテレビでもさ」  
「そうそうっ、私の勘では彼、くるわよ」

他愛ない会話をしながら二人の女生徒が、まだ人気の少ない廊下を歩いている。一人は、普段お嬢様なのだが、場所を変えれば普通の高校生だ。生徒のほとんどは、学園に気の知れた似た境遇の者が多いせいか、気張らずに過ごしている。

「じゃあ、またね」

教室の前でお嬢様な友人と別れ、ガラガラと音を立てて教室のドア

を開けた。とたん、目付きが鋭くなり、最後部窓際の席を睨むように見ている。皮肉をこめて彼女は口を開いた。

「相変わらず早いね、結城くん？」

女生徒の先には、ビン底眼鏡をかけて、ネクタイを第一ボタンまできっちり止めたワイシャツの首に結んだ結城の姿。その手には本がある。ただし、本人は気付いていないが逆さまだ。

結城としてみればもっと遅く来てもいいのだったらぜひそうするが、生憎浚の存在がそれを許さない。

眼鏡のツルをくいとあげながら、にやつと笑う結城。

「僕、油断すると遅刻してしまうので」

「そんなことは聞いてないっ！まったく…本読むんだったら元に戻したら？」

彼女はそう言って自分の席に着いた。

「あゝ」

慌てて本を戻す結城の姿を見て、呆れながら手帳をカバンから取り出して今日の日程を確認する。

「（５時までは学校で自由…その後帰宅して、今日はパパの外交官を招くパーティに出席か…）」

ため息を吐き、手帳を閉じる。

彼女の名は片瀬<sup>かたせみか</sup>美佳。男女問わず仲のいい彼女は、その人脈に後押しされて生徒会長になった。頭のキレも良く、人から頼りにされやすいタチである。

美佳はふと３日前の夜を思い出していた。彼女が暴漢に教われかけた時だ。

「神谷堅か…カッコ良かったなあ」

周りの良い男子は大体許婚がいたり、すでに付き合っている人が多く、残りはバカ坊っちゃまばかりだ。元々そちらの比率が多いのでよけい悪い。柄沢浚は付き合っていないみたいだが、付き合い始めた後、周りの女子が恐くてダメ。

第一、幼等部の頃から知ってる人が多い。恋人探しには、エスカレ

「ター式の学校は不便なのかもしれない。」「（勉強はできるんだし、変なやつだけどバカじゃないんだよね…）」

とりあえず近くにいた男子について考えてみる。本人は必死に——本当に必死で本を読んでいた。

「（以外と眼鏡を外せばカッコ良かったりするとか…）」

そこまで考えて、ハツとした。

「（なっ…何考えてるのよ私！？あの岩下結城よ！！無理にも程があるっっ）」

深呼吸を何度かして心を落ち着ける。——うん、落ち着いた——変な気持ちを抱えながら、美佳は自分に言い聞かせるように一人頷く。45分前。そろそろみんなが登校する時間。さて、精一杯頑張ろう。ここの私は、いつもと別の私なんだ——

一方、浚は校長室へ行き、パソコンを動かしていた。

校長室は校長——つまり敏一が不在の場合締め切られているのだが、浚にはその鍵が渡されている。結城は、どうせ必要ないだろうということで渡されていない。浚は経費を使い、校長室に敏一の物とは別にパソコンを購入している。さらにパーツを換え、天井裏にコードを這わして屋上の物と繋げ、天井裏に隠した処理専用のパソコンに直結させている。

すべて自分で工事したのだが、部品代等はすべて経費とは言うまでもない。

パソコンには、黒い画面に白い文字が映し出されている。その文字にさらに文字を加えていく。手は、尋常ではない速度で動いている。手の動きは決定キーを押して止まり、今度は画面が変化を示す。ゲージが動き、いっぱいになった瞬間〈防衛省〉と表示が出た。

「（ハックして接続できるのは1分内…それ以上はウォールが保たないな）」

キーを打ち、ウィンドウをいくつも開く。その中に、目当ての物は

あった。

「これか……。……っ!? マジかよ……。あの野郎、世界にケンカ売る気か!？」

ウインドウには、おそらく鷹派の今後の方針についてであろう文章が表示されている。

「(だが、俺が侵入して確認できるくらいだ。上の連中が把握しているのは間違いないだろう。…他の隊が動いたと報告はない。なぜ動かないんだ……。?)」

画面の一部が突然黒く欠けた。防御システムが復旧しはじめたようだ。

不安を覚えながら浚は、キーボード上の両手を走らせ始めた。

——つまり、このXが代入されるとこちらのYも変化し、よってこの答えが出る。ちなみにこの式を簡略的に出すには——」

「わかった、わかった! もういい、席に戻りなさい!!」

数学の授業。結城を当てた教師はたまらず叫んだ。少しつまらなそうな顔をする、にやりと笑って結城は席へと戻っていった。

「——え……。でだ。この式の解き方をもう一度——」

危うく取られかけた授業の主導権をどうにか取り返し、教師は講義を再開した。

「(残念だ、せっかく優越感に浸るチャンスだったのに)」

思いながら机の中から紙を取り出した。そこには、教科書の問いを説明した文章が、浚の筆跡で書かれていた。

結城は、変態優等生・岩下結城の役なのだ。浚ならいざ知らず、結城はとてもではないが、優等生と言える頭を持ち合わせていない。テストはいくらでも裏工作が可能だが、授業だけはそういかない。そのため、浚や敏一によって解答表に書かれた文章を改編して、当てられた場合にそれを答えるようにしている。

幸い、生徒を当てる教師はこの数学教師くらいだ。その程度なら結城でも暗記は可能である。

初めは要所のみ答えていたのだが、行き過ぎて答えると教師が自分の仕事が取られることを恐れ、慌てて止めることが判明。最近では趣味の一つになっている。

それでも当ててくるのは、教師としてのプライドなのだろう。それも空回り気味だが。

「浚はどんな調子かねえ…」

窓の外に浮かぶ動きの早い雲を目で追いながら、周りに聞こえないよう、小さく呟いた。

「すみません、その文法間違っています」

「えっ…？あ、すまない…」

浚は英語教師の書いた文法の訂正を求めた。また視線を手元に落とし、結城の数学用カンニングペーパーの作成に取り掛かった。

浚は一応高校の授業を受けてはいるものの、レベル的に言えば大体の教科は、大学院の修士程度はある。高校レベルならば一切問題はない。

浚は、朝にハッキングした時の文章が頭から離れずにいた。もしかすると、不相応な事柄に手をつ突っ込んでしまったのではないかと不安にかられてくる。

「（…放課後、司令に聞いてみるか。あいつが上手い嘘をつけるとは思えないしな）」

ふと顔を上げて黒板を見ると、また間違った文法が書かれている。

我慢しようと思ったが、周りが間違えて覚えても仕方ないので、結局言うことにした。

「キャー！ー！浚様！ー！ー！！」

「ちくしょう！バスケ部、止めてこい！！」



「ムリだろ！」

「……よっ」

体育、クラス対抗試合。黄色い声と、相手チームの必死の声が飛び交うバスケットコートの中。浚はレイアップをきれいに決めた。黄色い声がさらに沸き立つ。

浚にとって、訓練のために渡米した際に軍人共とやったバスケットに比べれば、日本の高校生など可愛いものだった。

現在50対8。大半は浚が入れてる上、当人は汗一つかかず次のリスタートに備えている。

お遊びのようなクラス対抗戦とはいえ、大差で負けるのは許せない。という訳で、因果のように一人の男が呼ばれた。

「結城、来い！秘密兵器の投入だ！！」

観客がさらに沸き立つ。確か、浚のクラス対結城のクラスだったはずだが、心なし人が多すぎる気がする。

それも仕方ないのかもしれない。浚のバスケの上手さは誰でも知っている上、納得がいく。だが、彼が上手いのは誰も予測し得ないことだろう。

「ぼ、僕？」

「そうだ。俺たち2組が1組に、浚に勝つにはお前しかないんだ！」

「わ、わかった」

前回の体育の時間に4組との試合があった。その時、結城は異常な上手さを発揮した——もとい、してしまった。

本部勤務の頃に、気の合った別部隊の兵がいたのだが、そいつにバスケの何たるかを染み込まされていた。

まさに体が勝手に動いてしまったらしい。一時校内の話題になるほどで、浚と敏一に絞られたのは言うまでもない。

「行けえ、結城！日頃の失敗をここで返上しやがれ！！」

「浚様！そんなやつに負けないで！！」

館内は異様なまでに盛り上がる。さながら全国大会でもあるかのようだ。

「……………」

浚はゆっくりと結城に歩み寄ると、握手を求めた。結城もそれに応じた。

「よろしく。いい試合をしよう」

「こ、こちらこそ」

ぐっと握り合い、浚はポジションへと戻っていった。

「浚とともにタイ張れるのはお前くらいだろうな。精一杯やれ……ってどうした、そんな引きつったような顔して」

「いや、何でもないよ」

「そうか？まあ、頼むぜ」

そう言い残してクラスメイトは去っていった。

結城の手には、紙を触ればくつきり手形が出るくらい汗が出ている。去りぎわに浚が言い残した言葉のせいだ。

「…本気出したら減俸って…確かに俺と浚のイメージが変わるけどさ…」

勝手に動く体を止められるか不安な結城だった。

ピーーーーーッ

高々とホイッスルが鳴り響き、試合終了を知らせた。

結果は75対52。終了と同時に浚の顔を遠くからうかがった結果、どうやらセーフのようだ。

浚が減俸依頼を提出すれば、結城に何の言葉もなく減額されているというシステムがいつのまにかできていた。

納得いかないが、反論しても言い負かされるのは目に見えている。それに、浚も横暴な減俸はしない。大体脅すだけで、実際減俸になったのは2、3回程度だ。

「惜しかったな、結城。まったく、何でバスケだけはそんなにできるんだかな。どうだ、バスケ部に入ってみないか？」

バスケット部のクラスメイトが声をかけてきたが、結城は首を横に振った。部に入ったら、それこそタダ働きになりかねない。それだけ

は本気で勘弁してもらいたかった。

「柄沢浚。時刻6・00、校舎内生徒の帰宅を確認。校内に異常なし」

「岩下結城。同時刻、校舎外の哨戒終了。異常見られず」

「よし、二人ともご苦労。帰宅していいぞ」

座ったまま敏一は、机ごしの報告を終了した二人に言った。しかし、浚は一步前に出て口を開いた。

「少しお聞きたいのですが……」

「ん？どうした」

勤務終了するとすぐに出ていくはずの浚の行動に少し驚きつつ、敏一は尋ねた。

一息置き、浚は单刀直入に言った。

「片瀬議員の考えについて……詳しく教えてください」

「っ！？どうして……」

「ちょっとした道から聞きました。……片瀬議員が、中国への攻撃を計画していると」

「っ！」

「待てよ、それどういうことだ！」

壁に寄り掛かって聞いていた結城が慌てて駆け寄ってきた。

「そのままの意味だ。今、各国が日本に対して何もできないのは、中国とアメリカの後ろ盾があるからだ。逆に、中国やアメリカにも攻撃できないのは、日本の世界最高峰と言われる兵器技術があるからだ。そのため、現在力の均衡が保たれている。だが、日本が中国に攻撃すれば、今まで溜まっていた苛立ちを晴らすように、アメリカも攻撃に参加するだろう。そうなれば中国と親密な他国は黙っていない。さらにその中からアメリカや日本に賛同する国も出てくるだろう。これで第3次世界大戦の出来上がりだ」

「けど、そんなの確率でしかないだろ」

「ゼロじゃない。それだけで片瀬議員にとって十分なんだろう。確率的にも高いしな」

浚は敏一を見た。手を組み、唇を強く噛んでいる。

「…それで、どうなんでしょうか？」

「…おそらく同じ辺りまでしか知らないだろう。そうゆう計画があり、賛同者を募っていることまでだ」

浚は何も言わず、敏一の次の言葉を待った。

「…私もそのことについては気になった。上官にも尋ねてみた。しかし、明らかに何か隠した様子で、知らないの一点張りだった。おそらく、中将の私すら知り得ないことが裏で動いているのだろう…」吐き捨てるように言い、こぶしを強く握る。真正直な分、辛いのだろう。

「そうですか。ありがとうございます」

事務的に礼を言い、浚はその場を後にした。

本人以外にその感情の強さをはかることはできない。敢えて触れないほうがいいと判断したからだ。

結城は軽く敏一の肩を叩き、浚の背中を追った。

二人は、近くの名香野荘と朽ちた看板の書かれた建物に、別々の部屋で住んでいる。

学園から近いという利点を最大に考えたため、築40年と大きい地震が来たら崩れそうな建物だ。

距離はおよそ5分。近いので知られやすいのだが、帰りの遅いのが幸いして生徒には知られていない。

二人はその帰路にいた。疲れた様子の会社員がちらほらと見られる。

「いいのか、浚。あれで」

「古傷抉ったけど、大丈夫だろ。あれでも俺たちの司令官だしな」

「そうだな。…で、どうするんだ、手伝ってやってもいいんだぜ」  
少し驚いたように結城に目を向けると、浚はわざとため息をついて言った。

「まあ、猫の手も借りたいって時もあるしな。お前の場合ネズミかもしれないが」

「ネズミって、おい！」

「たぶんジョークだ。まあお前には片瀬さんと接近してもらおうか」  
「…えっ？」

突然ぶっ飛んだ話にいまいち付いていけない結城。気にせず浚は続ける。

「俺とお前で生徒会に入る。俺はお前のサポートするから頑張れ。俺が女子と話すと、相手が硬くなってダメなんだよ」

「嫌味か、それ。第一何で片瀬さんなんだ」

「名字の通り、彼女の父親は片瀬議員だ。そこからうまくイけるんじゃないかな」

「なるほどね…」

腕組をして、話の流れを頭の中で整理する。名香野荘の、ペンキの剥げた屋根が薄闇の中に見え始めた。

「——わかった。とにかく、片瀬から片瀬議員の裏を取ればいいんだな？」

「ああ。頑張って仲良くなってくれ」

「おう…って違うだろ！」

「似たようなもんだって」

「…まあいつか…じゃあ明日からアプローチかける段取りしねえとな」

サビだらけの階段を昇り、お互いの部屋の前で止まる。ふと結城が思い出したように言った。

「久しぶりに、後でそっち行くからよろしく」

「久しぶりって…一昨日来た気がするんだけどな…」

「そうか？ いいじゃねえか、飲もうぜ」

親父のように猪口を持つように指先を曲げて、口元に傾ける。

「わかったわかった」

——今日も長い夜になりそうだな——

ため息を吐きながら、少し上がっている口の端を隠すように部屋へと入っていった。

この時、彼らは巨大な波に飲まれつつあることを知らなかった。日常は突如としてその姿を変えるものであり、その波から逃れることは、もうすでに許されていないのだ——

## FILE 2：束の間の日常（後書き）

：ギャグテイストを入れられず、申し訳ありませんでした。え、期待してなかった？ そんな殺生な…。ともかく、この話は基本構成がそれとなくできているのでなんとか読める代物にはなるかと。稚拙な文で、読みづらいでしょうがご勘弁を。これからも読んでください。できればメッセージあると嬉しかったり。それ以前に、このあとかきを最後まで律儀に読んでくださった方に感謝をこめつつ――

### FILE 3…それぞれの思惑

校長室にはいつもの面々が揃っていた。三角形のような構図が作られ、その三角形の頂点で浚と敏一に睨まれた結城がいる。

「…まあ…すでに手遅れでしょうけど…すみませんでした」

うなだれながら結城は小さく呟いた。敏一はすうっと息を吸い込むと、一声

「なんで後先考えて行動しないんだ！このアホ！！」

ビリビリと壁が震える音がかすかに聞こえる。この部屋が防音制でなければ、まず誰か飛んできただろう。浚は耳をふさいで堪えた――これでもうるさいくらいだ――のだが、結城はそういう訳にもいかず、直に鼓膜に響いた。

事の理由は、結城が夜中助けた女生徒である。助けたことには文句はない。しかし、その後名前を聞かれて『神谷堅』と答えてしまったのだった。

神谷堅の話題は、二、三日後にはかなり薄くなり、内心敏一としてはほっと一息付けたところだった。

しかし、それが今回の救出事件によって、二度の救出劇により正義の味方の存在が確かなものになり、揺るぐことのないものになってしまった。おかげで校内新聞部まで動く始末だ。

「つつ…だから悪かったと言ってるだろ」

キンキンとなり続ける耳を抑えながら呻くように結城は言った。

「助けたことはいいい。偽名を言ったのも、生徒間の話題で済めば言うつもりはなかった。だけどな……」

机の上に載っていた紙面を掴み、結城に叩きつけた。

「こんな全国新聞に載ったら特殊も秘密も何もないだろが！」

「…ごもつともで」

床に落ちた新聞の地域欄には『謎に包まれた正義の味方！有名学園の女生徒を救う』と大きく見出しが書かれていた。助けたのが新聞



社、社長の娘だったのがよけいまずかったのかもしれない。幸い顔は見られなかったのがせめてもの救いだった。

「とにかく、今後校内外の報道関連に気を付ける。人を助けるのは当然であり、元々その司令を出すつもりだった。最近徒歩の生徒が襲われる事件が続出しているからな。今後は構内に限らず、周囲二キロ圏内を警邏してもらうからそのつもりで」

「うわ：めんどくー」

「何か言ったか、岩下中尉」

「いえ。柄沢中尉及び岩下中尉、定時報告の後警邏の任務に当たります」

上官への反感は普通ならば処罰もの。従い、結城の場合減俸が処罰になっているのだ。金は人が生きることにおいて必要不可欠。経費が嵩むので、一定量以上の金銭的支援は受けられない結城にとっては、なおさらのことだ。

「了解しました。：それで、こいつの件はどうしますか？」

目で結城を指した。計るように浚は敏一に、極めて部下らしく尋ねる。敏一は多少身を堅くして答えた。

「とりあえず現状維持だな。問題がある場合は各自対応しろ」

「――了解」

浚は手本のように敬礼し、きびすを返して部屋を後にした。

「…今回のミスはマジで悪かった。けど、それに機敏な対応を出来てこそ立派な司令官だと思っけどな？」

そう言い残し、結城は部屋を出ていった。

「……くそっ：今まで順調に進んでいた道があんなやつらに……」  
歯噛みをして洩らす呟きには、少なからず憎悪がこもっていた。

「…いいのか、浚？」

「何がだ？」

登校時間までのわずかな間。二人は屋上の裏にある給水タンクに缶コーヒーを片手に寄り掛かって座り、空を眺めていた。

「敏一のことだ。言う意味の裏がわからない程バカじゃないだろ」俺でもわかったんだからな、と茶化すように付け加えた。真剣に話すな、と暗に言っている気がした。

空を見上げる。上半分は給水タンクに隠れて見えないが、その端から下に向かって走る雲が見えた。

——人も風のように巨大な存在に流され続けているのかもな——  
敏一と、自分の今の状態を比べながら思う。

「あれは少し自分を過大評価してる節がある……。残してると後で痛い目を見る。第一：俺はまだ司令官として奴を認めてはいない」

「同感だな……。けど、外れ者の俺たちをまとめられるのがいるのかね」

「たち、は余計だな」

「似たようなもんだろ。俺と関わったらもう外れ者の仲間だ」  
違いないと二人は笑った。

車の走る音が多くなってきた。専用駐車場に高級車が入り始めたことで、登校生徒が増えてきたことを示している。

「そろそろ行くか。：忘れてないな？」

「：ああ、できれば忘れたかったけど」

本日の課題。生徒会、入会。

決定した翌日に二人は敏一に手筈を整えさせ、翌々日の入会予定を組んだのだった。結城はもう少しゆっくりと言っていたが、早いに越したことはないと浚がムリヤリ進めた。

目的は片瀬会長。片瀬議員への接触を成すためである。

その役を結城が受けることになっていた。まずは親密になることが第一目標だ。

「大丈夫だ。お前ならできるさ」

「いや、かなり難しいぜ……。だって、岩下結城だからな……」

変体優等生、岩下結城。この壁は厚いのだろうか……？

片瀬美佳は友人と別れ、いつもより早い時間に教室へ着いていた。ふと後ろの席を見たが、毎朝見る顔がない。

「さすがにこの時間にいるはずないか」

カバンを下ろしながら掛け時計を見上げた。今日は早くに目が覚めて、何となくいつもどおり用意した。いつもどおり登校したら、結局早くなってしまった。

「（まあ、それだけでもないんだろうけど…）」

美佳はもう一度後ろの席を見た。結城の席は、特に他の席と離されているわけではないのに、不思議なほど周りと孤立している。

美佳が彼から目を離せないのはそんな感があるせいなのかもしれない。いつものいる人が、何気なく見てる人が突然いなくなる。その恐さがあった。かつての、父のように。

ガラガラッ

「っ!？」

突然音を立てて開いたドアの方をビクリとして振り向いた。結城だった。こちらが驚いたのを見て向こうも驚いた様で、しばしドアに手を掛けたまま固まっていた。

「…おはようございます」

おどおどした態度で頭を下げて彼はドアを閉めると、真っすぐ自分の席に座った。

安心していただけで返事のタイミングを逸した美佳は、一人居心地の悪さを感じていた。ついでに、結城の姿を見てほっとした自分に腹が立ってたり。

大体登校時間が同じで、少しの時間二人きりの状態があるせいかな、たまに話したりはしていた。それが助けて、何となく気になっていたことを尋ねてみた。

「そういえば、今日生徒会に入ってくる連絡受けてるんだけど、ど

うして突然入ろうって決めたの？」

「あ：それは浚が入れと言ったから――」

「えっ？」

「（あ、やべっ）」

生徒会に入るといふ気重なところから、つい素の口調が出てしまった。あわてて言い直しにかかる。

「あ、いえ、柄沢くんが一緒に入らないかと誘ってくれたので」

「ふん……」

――まあ、柄沢君がそう言うのもわからないでもないかな。頭はいんだし――

それよりも一瞬出た素が頭に残った。ぞんざいな口調で、とてもいつもの岩下結城には思えなかった。いや、それよりどこか聞いたことがある気がしていた。

――どこでだろ――

そう考えたとき、廊下が騒がしくなり始めているのに気が付いた。さすがに結城と話しているところは見られたくない。ちょっとしたことで外される、女のグループとはシビアなのだ。

疑問に思いながらも、とりあえず美佳は席に戻っていった。

「浚様ー！」

「……ん？」

廊下を歩いていた浚は、呼ばれて後ろを振り返った。初めのうちは戸惑っていた様付けの呼称、さすがに毎日誰かに呼ばれては慣れてくる。人間としてどうなんだろう、と思う毎日である。

駆けてきたのは150センチほどの背をした、少女とも言える女生徒だった。2学年の色のリボンをつけているので、一応同学年らしい。どう見てもそうは思えないけれど。

「こ、こ、これ受け取ってください！」

そう言って差し出されたのは、いかにもな感じに封をされた手紙だ

った。これも日常茶飯事、下駄箱にラブレターが入っているなんていう古典的な物を受けたこともある。

「ありがとう」

にこやかに笑って受け取った。彼女は恥ずかしそうにうつむくと、ぺこりと頭を下げて元来た道を走っていった。

——とりあえず見てみようか——

大概似た文面なのだが、やはり気持ちを込めて書いたものを無下に扱うことはできない。必ず目を通すことにはしていた。

ハートのシールを丁寧にはがし、中の紙を取り出した。

「：ん？」

中に入っていたのは三つ折りにされた白い紙だった。普通この手の物は便箋を使うはず、しかしこれはひどくシンプルだった。

少し戸惑いつつ紙を開く。中には女性文字で短い文が書かれていた。  
〈放課後5時、校舎裏に待つ〉

好きだのずっとあなたを見てたという言葉はなく、ただただ紙の中央に書かれていた。

背筋がぞくりとして彼女の去った方角を見た。蛍光灯に照らされている廊下が、自分の立つ場所がひどく暗いものと思った。

結城はいつものように本を読んでいた。次が移動授業なら、仮にも優等生なので早めに行かなければならない。しかし、次はロングホームルーム。よってこうして席に座ってれば問題なしというわけだ。

「おい結城、何読んでるんだよ？」

不意にからかうような声が横からかった。バスケット部のクラスメイト、住谷司だ。すみやつかさ 両親は大学病院の教授らしい。結城がバスケットをできる——しかも油断すればバスケット部員が負けるほど——と知り、それ以来よく話しかけてくる。長身で人当たりがよく、女子曰くかわい顔で人気は高い。俊とは違う路線の人物のようだ。

「ナポレオンだよ」

多少おどおどした感じを無くし、けれど岩下結城というキャラを失わずにと、慎重に調子を選んで結城は答えた。

「ナポレオンって・・・なんだっけ、『わが辞書に狂いは無し』って言った人だったか？」

「『わが辞書に不可能という文字はない』だよ。わざとじゃないのか？」

「わり、マジで間違えた」

司がそう答えると二人は笑った。司は、結城がこの学園で浚意外と素直に笑うことができた最初の友人だ。浚とも馬鹿話をするが、仕事柄、その方面の話が自ずと多くなってしまう。だから、相手のことを詳しく知らないからこそ気軽に話せる司の存在が結城にとって楽しかった。

「お前ら何笑ってんだ。まあ、どうせ司がロクでもないこと言ったんだろうけど」

別のグループと話していたやつが近づいてきた。これも、司の存在があつてこそだ。

「（普通の学校か・・・こんなのも悪くねえな）」

ふと2年前までいた、部隊の本部が懐かしく思えた。

すべての授業を終え、放課後の屋上。約束の時間まで残り30分だが、浚は結城を呼び出した。

連絡用端子は持ち歩いているので呼び出すのは簡単だった。まもなく階段を駆け上がってくる音が聞こえてきた。

「ふう：どうした、いきなり呼び出したりして。もうすぐ職員会議が終了するから、俺たちも生徒会議室に行かないと」

ドアを開け、息を整えながら結城は歩み寄る。

「そのことで：だ」

そう言って浚は内ポケットから白い紙を取り出して結城に渡した。怪訝に思いつつ紙の文字を確認すると、茶化すように言う。

「なんだ、またラブレターか。相変わらずモテるねえ？」

「……」

「…わかってるよ。そんな青いものじゃないことくらい…。だから睨むなって」

茶化す結城に真剣な目で睨み付けると、結城は手紙を返ししながら言う。

「…で？　どうするんだよ」

「どうするも何も、行くしかない。あと20分程で時間になる、俺は諸事情により遅れると言ってくれ」

そう言って屋上を去ろうとする浚に、結城は声をかけた。

「一人で行く気なのか？」

「しやうがないだろ。生徒会の方もあるんだ。…この手紙は無視できるものでもなさそうだしな」

振り向かず浚は答える。

「…わかった。端末のアラートシステム。やばかったら忘れるなよ」  
浚が忘れるわけの無ことはわかっていたが、言わずにはいられなかった。浚はああ、と一つ答えると指定の場所へと向かっていった。

校舎裏は滅多に人の手が入らないため、野草がだいぶ伸びている。そのため、人氣が無いので告白などによく使われる場所でもある。浚もよく呼び出され、そのたびに断っているのだが、今回は勝手が違った。念のためメリケンサックはポケットに仕込んでいるが、使わないことを願いたい。

校舎裏の、使われなくなった物置に手紙の主は寄り掛かっていた。

「5時5分前。時間には正確ね」

「正確じゃないやつでも、あんなの渡されたらこんなものだろ。…」

で、用件は？」

「まあまあ、そんな堅くならないでよ♪」

軽く反動をつけて体を起こすと、彼女は浚と正面で向き合った。

「私は鈴原朋。すずはらとも新聞部の部長をやってるわ」

「…新聞部がどうして俺を？」

努めて冷静に装い、朋に問う。彼女はびしっと人差し指で浚を指した。

「ずばり、女性についてどう思ってるか！そこをお聞かせ願いたいっ！！」

「…は？」

頭の中が白くなった。同時に一気に気が抜けた。——取り越し苦労かよ——思わず大きくため息をつく、朋が力説する。

「ダメですよ、ため息を吐くと幸せは逃げちゃいますよ！それにです、この質問はアンケートを取った結果ぜひ聞きたいことランキング第一位に選ばれたんですよ。あと——」

「わかった！わかったから……とにかく、質問に答えればいいんだな？できるかぎり手短に頼むよ」

「ありがとうございます！それではですねえ、まず一つ目は……」

「まだなの、浚くんは」

「す、すみません。もうすぐ来ると思いますので……」

ぐるりと円を描いた机に、各役職の長が着いていた。その人たちがハラハラと見守る中、美佳は未だ来ない浚への苛立ちを結城へとぶつけていた。

今日の会議は多少の計画確認も含まれるが、主題は浚と結城の執行部入りだ。自己紹介および暫定的役職について簡単に話し合うわけだ。

浚が来なければこの会は無かったも同然。けして忙しくない訳では



ないのに集まった人たちへ、面目が立たなくなる。今後のことを考えてもそれは避けたい。

という訳で――美佳の苛立ちは募り、結城は八つ当たりされているわけである。

「早くしてくれ、浚く」

アラートが無いということは、少なくとも生死のやり取りをしているわけではないと結城は考えていた。だから逆に早く来いとおもっているわけで。

「それにしても、浚くんが時間通りに動かないなんてめずらしいわね。よほど忙しいのかな」

少し考えながらちりとドアの方を見るが、人の気配はない。

「しょうがない……じゃあ浚くんの自己紹介は次回にして、結城くんの自己紹介と二人の仕事に関して話を――」

「遅くなり、申し訳ありません」

バンツと勢い良く開け放たれたドアの奥に息を切らした浚が立っていた。いかにも走ってきましたな演技なのだが、わかるのは結城くらいなものだ。

浚は美佳の前へと歩き、頭を下げた。

「すみません、急用が入ってしまいました。……と、会議はどの辺りまで？」

「まだ全く進んでいないわ。……さ、早くあちらの席に座ってください」

先刻の結城に対する振る舞いと打って変わり、上流校の生徒会長らしく優雅に席を示す。

浚が腰掛けるのを確認して美佳は一度全員を見渡した。

「――では、まず新しく生徒会執行部のメンバーとなるお二方に自己紹介をいただきますようか」

浚と結城は互いに目で合図を交わし、初めに結城が席を立ち上がり、一呼吸置いて口を開いた。

「よし、好調好調♪」

新聞部部长、鈴原朋は浚の質問に対する返答をメモした紙を見ながら上機嫌に言った。

「まあ、私の狙いはまだ大物だけだね。これもその布石だし」

投げ捨てるようにメモ紙を机の上に置くと、顔を上げて正面の女生徒に声をかけた。「篠」

「……」

「おい、篠原さん」

「……」

「――篠原優風！」  
しのはらゆうな

「はいっ!？」

裏返った声で慌てて顔を上げて答える優風。勢いはずれたメガネを直している。

集中して周りが見えなくなるのはいつものことなので、特に気にすることもなく続ける。

「あとは、あなたが岩下君から聞き出すだけね。ただし、慎重に親しくなってからよ。簡単に聞けるようなことじゃないんだから」

「は…はいっ」

「私の勘だと親しくなればきっと聞き出せるはずよ。彼は基本的に外れ者だし、興味を示せば近付けると思うわ。彼は朝早くから学校に来ているみたいだから、その機会を使って話をしてみたらどうかしら。それと本が好きみたいだから興味を示して――って、あなたは元から本が好きだったわね。とにかく自然にやって」

早口で喋る朋に優風はコクコクとただ頷くだけになっている。  
朋は呼吸するように一息置いて言う。

「とにかく、メガネどうし気が合うはず。頑張りなさい!」

一体どういう理屈なのだろうかと思いつながら、励ましてくれるとわかり、思わず笑みが浮かんでしまう。

「うん、ありがとう」

「：うゝ、どうしてあんたはそんなに可愛いかった！少しは私によこせ！！」

「きゃっ！？」

朋は優風に駆け寄り抱き締めた。

「正義の味方、神谷堅。絶対しっぽをつかんでみせるわ。あなたも会って、助けてもらったお礼言いたいでしょ？」

「う、うん」

「それならがんばるわよ！」

体を放したかと思うと今度は手を両手で包むように握ってきた。

「（うん、そうだ。もう一回会ってお礼を言わなくちゃ）」

強い意志を持ちながらも、結局控えめに握り返した優風だった。

会議を終え、浚と結城は屋上の柵に体を預けて眼下を眺めていた。部活などを終えて、各々車や徒歩で帰路についている。

結城はおおげさにため息を吐いた。

「ため息吐くと幸せが逃げるらしいぞ」

「あゝ？なんだそれ」

「今日会った、新聞部の部長が言ってた」

「ああ：手紙の人か。どうだったんだ？」

「質問攻めされたよ。大体50くらいは聞かれたんじゃないかな」

「それはお疲れさま」

微妙な間が開いて、結城がまたため息を吐いた。

「どうした」

「いや：なんか嫌な予感がするんだよ。特に、今日決まった役割とか」

自己紹介の後、浚達の役職について話されたが、これといって必要な部所が無かったため、暫定で生徒会長補佐となった。つまり、雑用なわけだが。

結城は眉間にシワを寄せて夕闇に染まる空を睨むように見ている。

「どんなところがだ？」

「明確にはわからないんだけど、何となく…な」

「まあ、その感覚わからなくもないな」

浚も結城と同じ空を見て呟くように言った。

「今日会った新聞部部長：あれだけで終わりそうにない気がするんだよ」

「なんだろうな…」

妙な感覚を抱えながら、日が落ちるまで二人は空を見ていた。

### FILE 3…それぞれの思惑（後書き）

第3話です。成り行き・行き当たりばったり・支離滅裂。どれが正解だろう。　だんだんと登場キャラが増えてます。多分、当初書いていた頃より流れが変わってるかと。まあ気にしないでください。

いつも読んでいただいて本当にありがとうございます。ここまでする人はなかなかの物好きかと思いますが、御礼申し上げます。なかなか拙い文章構成の環を抜け出せなくて苦労していますが、そんな中で書いたのかと笑いながらこれからも読んでやってください。

本の後書きに憧れていたせいかいつも長いですが、ここまで読んでくれてありがとうございます！ではまた

## FILE 4…止まらない世界

夜気に包まれた午後7時。5月という、そろそろ3ヵ月後の文化祭が視野に入りはじめる頃だ。

しのさきゆうな

篠崎優風は、文化祭の部活による出し物の企画原案を部員と話し合った帰りだった。様々な提案が出てきて、それをまとめるのはかなり体力を消耗するものだ。副部長である彼女は、部長が極秘調査とかで忙しいらしくその役を任せられてしまった。極秘調査とか言っ  
て、単に逃げただけなんじゃないかと何度も思った。けど、結局投げ出すことはできなくてこんな時間まで残ってしまった。

「（はあ…早く帰ろう）」

最近女性が襲われる事件が増えてるから、本当は校門の前にあるバス停から帰りたいくらいだ。しかし、父がリストラされて家計は苦しい。将来のためにと学費の高いこの学園に編入させてもらったんだ。これ以上迷惑はかけられない。

重いバッグを肩に掛け直した時、ふと後ろから原付バイクの音が聞こえてきた。

後ろを振り替えると、すでにバイクは目と鼻の先にあった。意図的に、抑えられたエンジン音。

「きゃ……」

叫ぶ暇も与えず、バイクに乗った男はすれ違いざまに優風のバッグを奪い去る。

「あつつつ……」

中には——おじいちゃんの遺してくれた大切なカメラが——

「だ、誰かあ！」

叫ぶが周りには誰もいない。強盗もそれを確認済みなのか、気楽にバッグをグルグルと振り回している。

：が、次の瞬間その動きは止まった。宙に吹っ飛ぶという形で。乗り手を失ったバイクはそのまま電柱にぶつかって止まっていた。

乗り手を吹っ飛ばした人影は宙に舞う男から、地面に当たる瞬間にバッグだけを奪い返していた。同時にカエルのつぶれたような声がした。

人影はバッグと優風を一度見比べて、彼女に歩み寄った。

「気を付けろよ」

差し出されたバッグを受け取り、あわててカメラを確認した。

「よかったあ…」

ほっと胸を撫で下ろしていると、彼はきびすを返して去ろうとしていた。

「ま、待ってください！お名前は…」

男はゆっくりと振り替えると、サングラスに隠された顔に笑みを浮かべた。

「神谷…堅だ」

そう言い残し、彼は去っていった。

「…い、優風、起きろ」

「ん…あ…？」

ゆさゆさと体を揺さ振られて彼女は目を覚ました。

辺りはすっかり日差しが弱くなり…人の数も少なかった。広い教室の中に居るのは、私とクラスメイトであり新聞部員の柳沢友香だけだった。

「もう5時だよ？いつまでも部活に来ないから、心配で来ちゃったじゃない」

「5時！？6時間目は！？」

「もう、とっくの昔に」

慌てて顔を上げた優風に友香はあきれ顔で答えた。

「次の特待生認定試験にかけてるのは分かるけどさ、少し根を詰め過ぎなんじゃないの？」

友香は優風の家計の苦しさを知る、数少ない友人の一人だ。そういう事情を気遣ってかどうか、よく色々と奢ってくれる。

バイトの給料の大半を家に入れているので、自由に使えるお金は千円足らず。とても周りと同じ付き合い方はできない。

「昨日何時に寝たのよ？」

「えっと…2時頃かな。バイトで帰るの遅かったし」

「2時って…もう曲がり角過ぎてるじゃない。しかもバイトが終わってからそれまで勉強してたんでしょ？努力家通り越してバカよ、バカ」

茶化すように、呆れながら友香はでこピンをした。

「あんたは頑張りすぎなの。少しは休むことも覚えなさい」

「う、うん…ごめん」

少し赤くなった額を擦りながら優風。友香はふうつとわざとらしくため息を吐く。と、思ったらガシツと優風の手を取った。

「よしっ、今日はバイト無かったわよね。ならば、これから街のスイートを食べ歩くわよ！お金は私が持ったげる、部活も部長と副部長がいらないから早々に終わってるわ。文句も心配もないわね？じゃあ出発っ」

「えっ、えっ？ちよっ、ちよっと!？」

どうにかカバンを掴んで、優風は友香に引きずられるように教室を出た。友香は携帯を取り出して、他の友人を誘いにかかっているようだった。

ほとんどこんな感じで付き合っている二人だが、こんな友香の強引さが優風は嬉しくて、羨ましかった。

「結城君、これお願い」

「岩下、すまないがこれもそこに並べてくれないか」

「は、はい」



ふらふらと結城は二人から両手いっぱい書類を受け取って近くの机に置いてから、次にその整理を始める。その机の上には、整理した山と未整理の山がどうにか分類されて載っていた。

文化祭の2、3ヵ月前というだけあり、一部の生徒と大半の教師は所々との契約や話し合いを進めている。

その内容や計画を生徒会は把握し、あらかじめの承諾を取り、また何らかの問題が出ればその解決及び謝罪等々こなさなければならぬのだ。

だが、同時に一学期の期末テストが近づく今、執行部員とはいえ簡単に使えない。

というわけで、成績にまったく問題のない3人が一切の仕事を引き受けることになっていた。

分担はパソコンの使える浚と美佳がデータの打ち込み、パソコンの使えない結城が整理という具合になっている。浚はもとより美佳はさすが生徒会長というだけあり、浚に負けず劣らず着々と仕事をこなす。

しかし、戦闘専門の結城は一般程度は雑用をこなせるものの、さながらコンピュータのごとく異常な速度であがる書類群に翻弄されていた。すでに限界に近いのだが、それでも働いているのはプライドか、減給の怖さか。

ともかく、紙一重で整理を追い付かせていた。

「岩下、次はこれ頼む」

「ま…待ってくださいっ!」

机に寄り掛かりながら、結城は浚に答えた。「少し休みませんか？さすがにこの量を3人でこなすにはちょっと…」

そう言って結城が目で指した別の机にはパソコンへの未入力、つまりまだ手も付けない書類が30センチほどの厚みで、十数個の山を作っていた。一体これほどの書類をどうやって作ったのか知りたいくらいだ。

「そうだな…。会長、今日はこの辺りにしませんか？疲れたまま続

けてミスを起こしても面倒ですし」

「そうね。じゃあ、このくらいにしときましようか」

その言葉に結城は見えないようにぐっとこぶしを握り締めた。

「ただ、あとこれだけ片付けたらね。キリがいいから。それと、結城くんはその机に置かれた分はちゃんと終わらせること」

そう言い美佳が目の前に取り出したのは厚さ15センチの書類。結城のこぶしから、ゆるゆると力が抜けていった。

「つ：疲れた：」

「ああ」

中庭のベンチに座り、二人は缶コーヒー片手にぐったりとしていた。あれから整理作業は程なく終了した。

しかし、直後に立案希望者が現れ、整理したファイルの中から過去の内容を探すことになった。

入力済みのものなら検索をかければ簡単だ。が、残念なことに未入力のものであったようで、よけい時間がかかった。

当初ホームルーム一時間前に終わる予定が、結局20分前になったのだった。

そして二人は、この後の一日を無事に過ごすべく、朝は人気のない中庭で体を安めている。

「しかし：学生ってのは大変だな。あれだけこき使われて報酬がないんだからな」

俺だったら絶対ムリだ、と感嘆とも似つかないため息混じりに言った。

「だからこそ執行部に好き好んで入るのも少ないんだろうな」

執行部員は、浚と結城を含めても8人しかない。三年3人、二年3人、一年2人だ。

一年は今後入る見込みもあるが、会長曰く今度の文化祭にスタッフとして参加しないかぎり、ほぼ諦めたほうが良いとのことだ。

やはり傍から見ても執行部が辛いところなのは見えるのかもしれない。しかし、事実かなり辛いから隠そうにも限界がある。

「こんな状況いつまで続くんだよ」

「とりあえず、文化祭終了までは間違いなく続くだろうな。文化祭一カ月前はこれより忙しくなるかもしれないから、多少覚悟したほうがいいかもな」

「言わないでくれ…」

耳を塞いで苦悶する結城を見ながら浚がコーヒーを啜っていると、予鈴が校内に響き渡ってきた。残りを一気に飲み干すと立ち上がる。

「ほら優等生。遅刻なんてできないぞ」

「あ、ああ」

結城が慌てて眼鏡を取りだして着けると二人は目を瞑り、一度深呼吸をする。スツと二人の顔が別のものへと変わった。

「さて…がんばりましょう、柄沢くん」

「ああ。君もな、岩下」

こぶしを軽くぶつけ合い、二人は校舎の中へと姿を消した。

「……………」

その二人の姿を、後ろからじっと見る人物がいた。

二人が完全に見えなくなると、その人物はきびすを返して反対方向へと姿を消していった。

優風は頭の中で何度もシミュレーションしていた。

普段は自分から行動することではなく、基本的に受け身の姿勢だ。

しかし、今回は受け身になることはできない。相手が自分を知らないのだから当然なのだが。

「（大丈夫、きっと成功する。今日はまだ近づくだけなんだから…）」

廊下を歩いていた足を、2組と書かれた表札の付けられたドアの前

で止めた。

昼休みのため、人の出入りは多い。それに紛れれば目立つことはないと踏んでいる。

「（新聞部だってみんなが知らなければ、の話だけどね）」

新聞部は活動内容がシビアなだけあり、結構目立つ部だ。少しでも関わったものは何と無しに部員を覚えていたりする。理由の一つに、美少女ぞろいという点もあるのかもしれないが。

優風は小さく深呼吸して、あくまで自然にドアを開けた。案の定周りの話し声でドアの開ける音は消えて、気付いている人は少ない。自然にかつ手早くドアを後ろ手に閉め、結城の席へ向かう。あらかじめ場所は調べてあるので迷うことはない。

席の前で止まると、結城がそれに気付いて優風を見た。

——ビン底眼鏡なんて見かけないものの着けてるから、どうゆう人なのかと思ってたけど：意外と目鼻立ちはつきりしてるし、カッコ良いかも——

「あ、あの：僕に何か用ですか？」

結城の声ではっと我に返った。慌ててその場を取り繕おうとする。もはやさっきまでシミュレーションしていた手順なんて、どこかに飛んでいってしまった。

「あ、そのっ……」

ふと結城の読んでいた本のタイトルが目止まった。考えをまとめずに、思ったまま喋る。

「な、ナポレオンっ。好き：なんですか？」

「あ、ええ」

「すごい人ですよ。一日三時間しか寝なかったって話ですよ」  
「確かにその話は有名ですね。けど、実はしっかり昼寝は取ってたんですよ。夜に深酒をしながら脂っこい物を食べて、神だ軍神だと言われてその責務のストレスを蓄めて、その上起きていなければならぬ昼間に寝て。そんな不規則な生活が死期を早めたといわれてるんです。今の生活習慣病みたいなものを患っていたのではない

ですかね」

「そ、そうなんですか…」

饒舌に説明する結城に気圧されながら、これはチャンスだとジャーナリストとしての血が叫んだ気がした。

瞬時に話の持っていき方をはじき出し、口に出す。

「ナポレオンって一般的に言われている人物像とだいぶ違うんですね。よければまた話してもらえますか？」

にこやかに返すと、結城も笑いながら返してくる。

「いいですよ。僕で良ければ」

そう答えて、結城はふと思ったように言った。

「ところで、どんな用事だったのですか？」

「あ、今度の会議。10分早く始まるから間違えないように言っておくように会長から頼まれました。次の会議、私も出席するので。」

「そうですか。わかりました、と伝えてください」

教室から出ると、どっと疲れが出てきた。スイッチが入ると確かに話すのが巧くなるのだけれど、その後の反動が強い。

——とりあえず話すきっかけはできた。うまく親密になって、柄沢浚との関係を聞き出さないと——

——数日が過ぎた。

放課後になり、浚と結城はいつものように理事長室へ報告のため来ていた。

しかし、二人が入った時見知った顔はいつもの席に座っていなかった。

「まったく、木田ちゃんったらどこ行っただ？」

上官を、ちゃん、呼ばわりしながら結城はパソコンの置かれた机の

前に座った。

「別に暇なわけじゃないんだ。いない時があってもおかしくないだろ」

「そうかあ？ あいつはいつも暇そうに見えるけど——て、このパソコン電源入ってるし」

パソコンはモニターを消してあるだけで、電源が入ったままになっていた。

「まったく、消し忘れるなんてそろそろボケてきた——」

結城がモニターの電源を入れ、映し出された画面を見た瞬間、声を止めた。

「どうした？」

壁に掛けられた賞状を眺めていた浚は、不自然な結城に歩み寄る。画面に映し出されていたのは、一通のメール。

木田専用のメールアドレスは何重ものパスワードが掛けられ、普段入ることができない。容易に見られてはならないメールなども交換されるからだ。

タイトルには『緊急指令』と書き込まれている。浚はその下の本文に目をやる。瞬間、言葉を失った。

『片瀬統一議員の娘、片瀬美佳誘拐される。鳩派の一派と予想。部隊外への他言は一切無用』

——二人の、長い夜が始まろうとしていた——

## FILE 4…止まらない世界（後書き）

どうも、ついに4章まで突入してしまいました。もう何もかも取り返しがつきません、この駄文の乱立は……。読んでくださっている方々に戴いたアドバイスを、何とか形にして見せようと努力にノリを——もとい努力を重ねているのですが、この阿呆には実現はなかなか困難らしく、、本当にすみません。今後どうにかしていきますので、子の場を借りて謝罪とお礼をします。次回より展開が本筋へと動き始めます。そして、徐々に彼ら彼女らの抱えるものが浮き彫りになって（いく予定で）いきます。どうかこれから『変・人』をよろしく！

## FILE 5：重い鎖

浚と結城がメールを確認してすぐに、木田は理事長室へと戻ってきた。

木田は区役所に置かれた支部へと向かい、支部長へと指示を仰いでいた。

本来区役所は国家公安委員会という、浚ら3人のような分隊を統括している国家治安委員会と対立する存在である。

国家公安委員会は警察を統括し、国家治安委員会は防衛省を統括している。公安は市民生活を重視し、治安は緊急時に対応するということだ。

両者は、基本的に国の平和を守ると同じ目的を持っている。しかし、どこか縄張り争いのような頭があるせいか、長年犬猿の仲状態が続いている。市民は、手を組めば無敵なんじゃないかと思っていたりするのだが、長年染み付いた因縁はそうそうに断ち切れないらしい。

区役所は公安委員会の情報も行き交う。その情報を入手するべく、区役所の中へ秘密裏に国家治安委員会の組織を忍ばせているのである。

とはいえ、公安側もそれを黙認して流れてくる情報を得ている。両者同じことをしているのは、何故か暗黙の了解にもなっている。

市民の信頼を得て、相手を潰そうと努力しているので犯罪はこの二つができる前より激減している。競争心を煽って結果が出ているので、これはこれでいい状態なのかもしれない。

その区役所に、木田は指示を仰ぎにいつてきた。理事長という役はこうゆう場合、区役所へ容易に入れる利点もある。「木田！どういうことなんだ！？」

「司令、詳しいことを話してください」

部屋に戻ってきたばかりで、いきなり二人に詰め寄られた木田は一



瞬困惑した表情を見せたが、パソコンの画面を見て理解した。

理事長の机に座り、机越しに横に並ぶ二人を見てから一息ついて口を開いた。

「本日未明、本校生徒である片瀬美佳が教われた。国会議事堂へと犯行声明が出された時点で発覚。それが1時間ほど前だ。声明内容は：片瀬議員を辞職させろ、らしい。あとはあのメールに書かれて  
いることだけだ」

「…他部隊の出動は？」

しばし考え、自分達が動くことは間違いないと踏んでから浚は尋ねた。

「今のところない。少数の犯行だろうから、そちらで間に合うだろうと言われた。昼間に人目につかず、お前たちに気付かれずに誘拐するほどのやつらだと、わかってるはずなのにな」

吐き捨てるように呟く木田。こう見ると、完全に冷静になれない辺り若さを感じる。

「基本暇な部所だから、能力があるのか不安な連中が試してるんでしょう」

「何か、そう思うと腹立ってくるな…」

「事実だからしょうがないだろ。ついでに汚点も多いしな、神谷くん」

「はい、すみません…」

二人の気の抜けた会話を聞いていて、不安に思いつながらも司令として指示を出す。

「一応援護要請は出しておこう。それと、おそらく敵は武装しているだろう。銃器の携帯を命じる」

その指示を聞いて、浚はわずかに眉根を寄せたが、それに気付かず木田は続ける。

「ただし、殺すことはするな。けして殺さず、生きたまま捕らえろ」  
「司令」

指示を聞き終えて、間髪入れず浚が口を開く。

「銃器の携帯は少し過度なのではないでしょうか。それに、結城ならば見つからずに目標の奪還・犯人の捕縛は可能です」

「もしものためだ。用意しておいても憂いはないだろう」

「しかしっ」「それに、これは支部長からの命令でもある。私は伝えているに過ぎない」

「……そうですか。了解しました」

軽く歯噛みをして敬礼すると、浚は部屋を後にする。

「……初めて見たな、あんな顔をした浚は」

幾分驚いた様子で浚の出でいった扉を見ながらつぶやくと、結城はかすかにため息を吐いた。

「――色々あるんだよ、あいつにもな……。じゃあ、これから作戦立てて助けに行ってくる」

結城が出ていくのを見届けて、木田はパソコンを動かしはじめた。

――浚の過去：部下の昔を把握しておくのもいいかもな――

二人は巡視を終えた後、夜を待って学校の屋上に立った。すでに9時を回り、人気はない。警備システムは最低限の行動範囲を無力化してあるため、作動する心配はない。

日が落ちるまでに入手した情報は到底満足のいくものではない。むしろ、この2、3時間で最低限の情報を手に入れた浚の手腕により、今夜の決行が可能になったことのほうが驚きである。

いつものような軽い雰囲気は消え、二人は腰を下ろして向かい合っていた。浚が作戦内容を結城に説明する。

「潜入場所は半径1キロに民家の無い郊外にある、3階建ての廃墟だ。金持ちが箱だけ建てたらしいが、ろくに使われず売り払われたらしい。ただ廃墟といってもダクトは完備されている。それを利用しようと思う……。これが地図と、そのダクトの場所だ」

そう言って紙を取り出した。いくつもの四角で部屋と廊下が書かれ、その上に赤いマーカーで何本も枝分かれしてそれぞれの部屋に繋が

る線が引かれている。おそらく、これがダクトだろう。浚は緑のマーカーを取出し、赤い線をなぞるように線を引く。

「おれが一番適当だと思うのはこの道だ。最も奥まで潜入できる。捕まっている場所はわからないが…この3階のどこだろうと踏んでいる」

「3階まで行くには？」

「確認してみたが、建物の横に非常階段があった。扉が壊れかけているようだから簡単に開く。ただ、そこには見張りもいるだろうな」

「つまり、見つからないように始末しろってことか」

「そうだ。少人数だという話だが、どう考えても10人は固いぞ」

「10人か…。力量次第だが、できない数じゃないな」

「信用している」

そう言いながら浚は銃の入ったホルスターを結城に手渡した。

「えー、ショットガンとかライフルじゃないのかよ」

「んなもの潜入任務に使えるか！このくらいのほうが振り回しやすい。弾薬もずっと安価だしな」

浚は巡視を結城に任せ、街の裏道にある雑貨店奥に造られた武器庫へと銃器を取りに行っていた。巡視をしなければならぬというのもあるが、本音は結城が物々しい物を取り出しかねないからだ。

前回、結城が遊んで詰まれた爆薬に向けてバズーカを構えた瞬間、壁から飛び出したガトリングやらレーザー照射機に取り囲まれた、という事態があった。その後こっぴどく怒られたおまけ付きだ。さすがに二度もそんなことはあってほしくない。

「ワルサーPPK。全長151ミリ、重量535グラム、弾数7+1発の自動拳銃…だっけ？」

結城はホルスターから銃を取り出し、作動を確認しながら言う。

浚は驚きながら答えた。

「よく覚えてたな。さすが通称・戦闘屋だけあるな」「誉めるなよ。おだてると…うわっ！」

取り落しとなった銃を指で何度も弾いてから、どうにか両手

で押さえる。結城は大人しく銃をホルスターにしまった。

「…こうなるんだよ」

「なるほど」

浚は頷き、あらかじめ装備しておいたホルスターから同じ銃を取り出すと、作動を確認する。

ふと結城は、なめらかに手を動かすのと反対に暗い顔をしている浚を見た。

「どうした、浚。そんな顔して」

「あっ…ああ、いや何でもない。使わないほうがいいな、と思ってさ」

「確かに。人撃つのは気が重い」

「…本当にな」

重い声と共に、作動確認を終えた銃をしまう。

「(まさか、浚のやつまだ…)」

結城の脳裏にふと何かがよぎったが、それを振り払うように首を軽く振った。

腕時計を確認すると、すでに10時近かった。浚は結城に向き直って口を開く。

「さあ、そろそろ行動開始だ。作戦所要時間は30分未満だ。迅速に、的確に。俺は外で待機しているから、お前の侵入と合わせて陽動として動き出す」

「わかった。…死ぬなよ」

「お前もな」

こぶしを打ち合わせ、部屋の中に設置された1階への滑降口を使い二人は出動した。

辺りはしんと静まり返り、気配は何一つない。おそらく、ここに犯人達がいると言っても警察は動かないだろう。もとい、治安側の自

分達が公安に助けを求めることはできないが。  
浚と結城は近くの茂みに腹ばいになり、軍用双眼鏡で外観を確認する。

「正面に2人、裏に2人、非常口に見えるだけで1人か」

「作戦通りで問題ないな。：行ってくる」

結城は建物を大きく回り込み、非常階段を静かに昇る。それでも常人以上の速さだ。

間もなく着いた非常階段の中腹辺りで上を確認すると、見張りが眠そうに結城のいる階段と逆を向いて旨そうに煙草を吸っている。

結城は音もなく近づいたかと思うとその口をふさぎ、首筋に注射を打ち込む。見張りは一瞬もがいたが、すぐにガクンと膝を折って静かになった。

「浚特製の即効睡眠薬だ。終わるまで寝てな」

結城は注射器をしまうとホルスターから銃を取り出し、背中で扉に張りついた。

そっと窓から中を見ると、眠そうにしながらしゃべっている見張り達の姿が目映った。

「007の映画でワルサーPPKにサイレンサー付けてたな、確か」  
そう言いながらサイレンサーを取り付けると、足元で寝ている見張りの襟首をつかみ持ち上げた。ちょうど立っているように見える高さで支える。

片手でドアを開け、盾にするように少し中へと入った。それを見留めて見張りの一人が片手をあげて声をかけてきた。暗いので入ってきたやつ顔などよくみえないのだろう。まるで警戒心が無い。

「おう、お疲れさん。けど、まだ交替には早いだが。バレないうちに戻れよ」

そう言ってまたバカ話を始める見張りたち。

結城は寝ている見張りを片手で支えたまま、ゆっくりと銃の狙いを先程声をかけた見張りに定め、引き金を引く。ボスツとくぐもった音が響く。

「うっ!？」

弾にあたり、ぐらりと体を倒す見張りの一人。別の見張り達が結城の存在に気付き、案の定装備していたサブマシンガンを構える。

「てめっ…うっ!？」

「ぐっ!」

「ふぁ…」

盾にしていた見張りの体を支えていた手を放すと同時に横へと飛び出し、すかさず3発撃ち込む。当たった瞬間に彼らは床に倒れこんだ。

結城が撃ったのは麻醉弾である。火薬の量を抑えて弾速を落とし、弾頭に注射器を取り付けた弾薬である。

天井を見渡すと、部屋の端に鉄格子の蓋が取り付けられた穴を見つけた。

結城はポケットから手のひらサイズの拳銃を取り出す。普通の拳銃とは異なり、銃口から魚を突くモリのような物が飛び出している。ダクトの横に銃口を向け、撃ちだすとモリはワイヤーの軌跡を残しながら天井に突き刺さり、引っ張ってもビクともしない程完全に固定された。

グリップ上部に付けられたスイッチをへSHOTへROLLに切り替え、もう一度引き金を引くとワイヤーが巻き取られ、結城の体は天井に引き寄せられる。

蓋は押し上げると思いの外簡単に開き、結城は難なくダクトに侵入できた。ちょうどその時、階下から銃声と爆発音が鳴り響いてきた。おそろく、浚であろう。

——死ぬなよ、浚——

一人が腹ばいになって、ようやく通れる中を、結城は進み始めた。

「どこだ!？逃がすな!！」

「いたぞ、その影だ!」

「くそっ、逃げ足の早い！」

浚は結城が潜入したと同時に動きだした。

まず正門を横から攻め、見張りの一人を首筋への手刀で無力化する。もう一人が撃つのをかわし、同じように眠らせる。

銃声を聞き付けた別の見張りが飛び出してくるのを、手榴弾で応じる。爆薬をかなり減らしてあるので殺傷能力はほとんどないが、代わりに催涙ガスを仕込んである。

さらに見張りが飛び出してくるのを見ながら、自分という的を晒しつつ逃げていたのだった。

これほど派手に陽動をしているにも関わらず、浚は一発の弾丸も撃っていないかった。いや、手に持ちすらしていない。

懷からさらに手榴弾を取出し、投げる。それは空中で発火し、強い閃光を放つ。閃光弾と呼ばれる手榴弾の一種だ。

「み：見えねえ！」

「油断するな！：ぐえっ！？」

見張り達がひるんだ隙に、素早く敵に接近してみぞおちに拳を打ち込む。刹那二人目も同じくみぞおちへ。二人は前のめりに倒れこんだ。

見張り達の目が回復してきたのを見計らって、また逃げる。仲間をやられた見張りは怒り、冷静さを失っている。そのため、簡単に策にはまってくれている。そのおかげで10数人を一度に相手できているとも言える。

この程度ならば浚でもこなせる。正直、技術ならば結城に負けず劣らずと言えるだろう。

決定的な差は、戦闘に対する嗅覚のようなもの。瞬時に危険を察知し、的確に対応する、本能といえる勘の良さだ。その差は、努力で到底埋められるものではない。才能という、望んでも得られないものだ。――感じたくない劣等感だな――

「そこかっ」

「っ！？」

不意に真横から声が飛び、銃機のカチャリと持ち上がる音が鳴る。  
ガガガガガッ！

転げながら交わし、足首に仕込んだ麻酔薬を染み込ませたダーツを  
投げる。

「うっ……」

見張りはすぐに沈黙してその場に倒れた。

間髪入れず迫ってきた見張り達から銃弾の雨が降ってくる。

「くっ…この…っ！」

残り2個の手榴弾一つ目を見張り達に投げ、足止めを食わして逃げる。二個目は別方向からの追っ手に。

これで手榴弾は無くなった。残るは足首のダーツ4本に催涙弾、それと…結城の持つものと同じ銃が一丁。ただ、麻酔弾はすべて結城に渡してしまい、装填されているのは実弾だ。正直ここまで苦戦するとは思っていなかった。

「（自分を過信しすぎたか…あの時から何も変わっていないな…）」

浚は胸の銃を取り出そうとグリップを握ったが、歯噛みしてその手を離れた。「（…だめだ、俺には使えない…）」

ザクザクと見張り達が土を踏み走る音が聞こえる。まよわず接近しているのを聞き、場所が知れていると判断して低く横に飛び、体制を整えつつ走りだす。走った跡を銃弾がうがつ。

「（だが…せめてあいつが戻ってくるまでは…！）」

浚は催涙弾に手をかけ、敵の足元に叩き付けた。

——いたな——

結城は順調にダクトを移動し、目的の部屋を下に見た。あとは下りて片瀬を救出、頭を捕まえればいいだけだ。浚が屋外で陽動しているため、中に残っているのは少数のはずだ。

先程からダクトに響いていた喧騒からすると、20人近い人員が浚の対応に向かっている。明らかに分の悪い状態だと想像しやすい。



早く救出して援護に向かうべきなのだろう。

しかし、結城の中に嫌な予感が渦巻き、それが次の行動を躊躇させていた。

——殺気……いや、何かもっと別の——

「出てきたらどうだ。そのネズミ」

「っ!？」

コンツと腹に軽い振動が響いた。天井——それも、明らかに結城の居場所を狙っての行為。

諦めと覚悟を抱き、結城はわずか先にあったダクトの蓋を開け、体を滑り込ませた。

「……っ! 神谷堅!？」

後ろから片瀬美佳の声が飛んでくる。どうやら目の前に着地したようだ。それならば話は早い。最重要課題は片瀬美佳の救出だ。こいつらの始末は治安委員会にでも頼めばやってくれるだろう。

……が、結城は腰のトンファーに手をかけたまま動かなかった。否、動けない。目の前の弾丸を宙に投げて遊んでいる長身の男から、容易に逃げ出すことができるとは思えなかった。

「君とは以前会ったな」

彼は弾丸で遊ぶ手を止め、結城に言う。

「どこだっけな? 覚えてないんだけど」

トンファーを引き抜き、両手に油断なく構えつつ返す結城。彼はポケットに弾丸をしまい、自然体で話す。

「覚えていないのか? まあ無理もない、ザコを演じてたからね。……じゃあ、これでわかってくれるかな?」

そう言って、彼は背中の手を回すと、一本の鉄パイプを取り出した。片側には布が巻かれ、普通の使い方と目的が異なっていると伺える。ふと、前に見た光景とダブった。

「……まさか、あのときの……」

にやり、と男は笑った。

「そう。一カ月前、一度目の誘拐計画を阻止された人間だ。今回は

成功したけどな」

「…そうだ！あの時言った合格ってのはどういう意味なんだよ！！」  
彼の最後に残した、『合格だ』の意味。深くは考えなかったが、この際聞いてみたい。結城はそう考えていた。

彼は首を鳴らしながら天井を見上げ、もう一度結城に向き直ってから口を開く。

「――俺の遊び相手になってくれそうだな、そういう意味だったと思ってくれ」曖昧な言い方をする彼に、結城は食い下がろうと一歩踏み出そうとしたが、彼が鉄パイプを目の前まで持ち上げたのを見て止めた。

「じゃあ、楽しませてくれよ。今度は手加減しないからな」

彼は全身をクツと曲げたかと思うと、弾けるように結城へと攻めかかってきた。

ガガガガッッッ

「くっ…」

浚は前に飛び込み、転がりながら銃弾を避ける。全身はすでに泥だらけになり、あちこち擦れや弾で破れている。夜の巡視に使っている黒を基調にした服は、もはやまともな原型を留めていない。

少しずつ逃げる範囲を広げ、相手に深追いさせるようにしているが、冷静になり始めている敵は簡単にのらない。

時折攻めては一人二人と眠らせているのだが、なかなか敵は減らない。あと6人強はいるだろうか。

胸の銃は未だに一度も引き抜かれていない。何度か手をかけたものの、その度に躊躇し、結局抜かないのだった。

ガガガッ

「うっ!？」

不意に、太股へ焼けるような痛みを感じた。見ると黒い穴が開いている。そこからだらだらと血が流れだして、直撃を受けたとわ

かった。

足に力が入りにくい。まるで痛みが力を奪い取っているようだ。浚の動きが急激に遅くなったのを感じ取り、見張り達は一気に畳み掛けるように詰め寄ってきた。

反射的に銃を引き抜き迫る敵に向けた――が、刹那手は震えだし、目眩と吐き気がした。

その隙が敵に勝機を与えてしまった。見張りの一人は、グリップで叩こうとした浚の腕を掴み、関節を取って浚を俯せに地面へ叩きつけた。

「おとなしくしろ！」

「（ここまでか：悪い、結城）」

頭上から向けられた銃口と自分の腕を押さえる手を見ながら、自分の結末を感じつつ目を閉じる。

刹那、遠くから強い光と、十数発の銃弾が飛んできた。

それは、浚に一発も当てる事無く見張り達の足を的確に貫いていた。次の瞬間には強い光を背に武装した兵が走り込み、次々と見張り達を押さえ込んだ。

「なっ……？」

状況を掴めないまま、体が自由になった浚は体を起こしながら光源を眩しげに見る。白い光の向こうに、微かに装甲車の影が見える。その奥から男が一人、ゆっくりと歩いてきた。

「よう。久しぶりに見たと思ったらひどいカッコじゃねえか」

「……っ！？…お前……！」

「っああ！！」

「ふっ！！」

火花を散らす二つの鉄の棒。常人では追いつくのは不可能な速度で、両者は得物を繰り出している。結城は一跳びで2メートル近く相手と距離を空け、次の瞬間は低く飛び掛かるように近付き、目の前で

床を蹴って右へ体を逸らすと、男の左肩にトンファーを振り下ろす。その不規則な動きに関わらず、長身の男は難なくタイミングを合わせ、強烈な一撃を片手の鉄パイプで受け流す。さらには空いた手で、受け流した勢いのまま拳を結城へと振り下ろす。紙一重で結城はそのまま前へ飛び込んでかわす。

後ろでブンツと男の拳が空を切る音を聞きながら、結城は片手で体を宙へ跳ね上げると半回転して着地して振り向く。

「…強いな」

ふうっと大きく息を吐いて結城は呟くように言う。

「お前もなかなかだ。合格ラインは越えるな」

「そりやどうも」

男は鉄パイプを一度クルリと回すと、パイプの中央に持ち手をずらした。さながら棒術使いの構えだ。

「では…そろそろ本気で行くぞ」トン、と軽く爪先で床を蹴ると先刻と同じく全身を縮めたバネのように曲げた。

足に力が入るのが見える。

——来るっ——感じると同時に反撃に備えてトンファーを目の前に

——

——が、次の瞬間司会がブレるのを感じた。その後、それがみぞおちに入った男の鉄パイプによるものだ気付いた。

いつのまに接近して打ち込まれたのか——何も見えなかった。

「——カハッ」

咳き込んで膝をつくと目の前に血がポタリと落ちた。鉄臭い味がじわりと口の中に広がる。内蔵のどこかが傷ついたようだ。

「くっ…そ…」

「ダメだな。所詮本気を出せばこの程度か」

頭上から男の声が降ってくる。まともに喋ることすらままならない。

「さてと、この辺りで死んでもらおう」

そう言って男は鉄パイプを持ち上げ、振り下ろした。ガツと鈍い音がして、結城の頭の横で鉄パイプが床を穿った。「——」思ったが、

この辺にしておこう。依頼分はこなしたしな」

そう言つて男は窓へと向かうと、壊れた窓に手をかけた。

「ごほっ…待て…依頼つてどういう…っ」

ぐらり、と目の前が揺らいでそれ以上の言葉は出なかった。もはや意識を保っているだけでもやっただ。

男はその姿を見ながら笑つた。

「それは言えないな。…まあ、そのうちまた会うこともあるだろう。そのときまでに、もっとガンバレよ。勝ったら教えてやるさ——もつとも、そのころには知ってるか」

そう言い残し、男はひらりと3階にも関わらず飛び降りた。あの身体能力だ、3階程度の高さだったら造作もないのだろう。

「結城！」

意識が消えかけた瞬間、親友の声が聞こえた気がした。

結城は夢を見ていた。

いや、夢のはずなのだが、ひどく現実的だ。

それは、どこか懐かしい雰囲気のある小さな木造の、古びたバーだった。そこにはよく顔見知った、本部の訓練仲間がいた。その中に俊の姿も見える。

——…ああ、懐かしいわけだ。ここは、本部のバーだ。そして、これは訓練仲間の入隊祝い——

「おい、結城！何そこでボーッと突っ立ってるんだ。早くこっちに来やがれ！」

不意に一人が結城に呼び掛けてきた。——夢、じゃないのか…？まさか昔に戻ったとか——

「聞いてんのか？結ちゃんよ！」

「えっ！？お、おう」妙な感じはするが、とりあえず深くは考えず、結城は空いた席に座った。

「まったく、少しは浚を見習えよ。しっかり5分前に来てるんだぜ」

「親友とはいえ、浚もこんなやつのお守りは大変だな」

「うるせえっ！で、全員集まったならさっさと始めようぜ」

笑いながら茶化す友人達に一声浴びせると、結城は先を促す。

「だな。マスター、結城に同じ物を――じゃ、俺が音頭をとらせてもらおうかね。みなさん、グラスをお持ちください！：それでは、中原軍曹、端間軍曹、勝浦伍長の入隊を祝して：乾杯！」

『かんぱーい！！』

互いにグラスを打ち合う音が鳴り響き、7人ばかりのささやかな祝賀会は始まった。

「ほれ、結城！景気付けに一気飲みだ！：まさか、上官の命に背かないよなあ？」

中原軍曹は、多少顔を赤くしながら結城に絡むように薦めた。結城はその光景をただぼんやりと見つめていたのだが、その声で目が覚めたように立ち上がった。

「岩下兵曹、一気飲みいきます！」

「おいっ、それ酒だろ！未成年者が飲むな！！」

「気にするな！祝いの席で飲まずにいつ飲む！！」

多少薄めにしたバーボンソーダを一気に飲み干すと、おお、という歓声と浚のため息が聞こえてきた。

多分一番幸せだった時。

結城は飲みながら思った。

こいつらとは、もう、会えないんだな、と。

結城は目が覚めるといきなり白い天井が目に入った。見渡すと、何度か訓練中のケガで放り込まれた時に見た、すべての部屋に律儀に貼られている〈初心貫徹〉と見事な筆で書かれた掛け軸が目に入った。コピーではない辺り、本当に律儀だ。

「（ってことは、軍事病院か…）」

起き上がろうとしたが、体全体にほとんど力が入らず、かろうじて動く首を動かして自分の体を見た。腕にチューブが刺され、至る所に包帯が巻かれている。

「（そうか、俺はあの野郎に負けて…）」

コンコン

不意に扉がノックされた。返事は元から期待されていなかったようで、すぐに開かれた。

「ん。目、覚めてたのか」

浚だった。両手が旅行バッグと、籠に入った果物セットでふさがっている。

歩み寄ると、備え付けの椅子を引き寄せて座った。

「調子はどうだ」

「最悪だよ…体が全然動かねえ」

「まあ、麻酔効いてるから当然だろうな。それに全身へみぞおちを最大のものとして、およそ8発叩き込まれてるからな」

「8発……」

あの一瞬にそれだけ打ち込んでいたのか、と思いながらもあの場で動けなくなった理由が腑に落ちた。

結城は白い天井を見てつぶやいた。

「…情けないな…戦鬨屋って言われてるくせに何もできなかった…まったく、中尉失格だな…」

「……………」

「痛てっ!？」

浚は結城の額をぺしっと叩いて睨み付けた。

「何弱気なこと言ってやがる。たかが一人に負けた程度だろう。らしくないぞ」

浚は一度言葉を止め、続ける。

「大体やつに勝とうと思うのが間違いだ」

「…?どういう意味だ?」

「それについては情報源から…いるんだろ、入れよ」

浚は入ってきた扉に向かって声をかける。すると扉が開いて、軍服姿の男が入ってきた。サングラスをかけていて顔は見えないが、襟章と胸のウイングマークで空軍大尉であるとわかる。

彼は何も言わずに敬礼した。相手が上官に当たるので、何とも変な気分だ。「いつまでも騙してないで、それ外せよ」

「なんだよ。普通じゃ面白くないだろ」

そう言いながら彼は少し勿体ぶりながらサングラスを外す。結城は思わずあっ、と叫んでしまった。

「あ…安藤!？」

「そうだ。久しぶりだな、岩下」

あんどたかひろ  
安藤崇宏。浚と結城がまだ兵曹の頃に、士官候補生だった男だ。

身体能力に長け、現在の浚と結城の基礎を作ったといっても過言ではない。「しばらく見ないうちに昇格したんだな」

「前会ったのは2年前だったから、俺は中尉だったな。お前らだって軍曹から中尉か？えらく立派になったじゃねえか」

「まあ確かに、こいつが中尉になれたのは奇跡だろうな。今の実力主義じゃなく、昔の資格制度だったら間違いなく今も軍曹止まりだ」

「浚、それはねえだろ…」

結城は俯きながらも否定できない悲しさを抱きながら、先程浚の言った言葉を思い出して安藤に尋ねた。

安藤は頷くと、話してくれた。

男は通称ドラゴン。名前の川崎龍から来ているらしい。ただ、これも本名かどうか解ったものではない。

依頼請負人として世界各国を飛び回る人物。射撃・格闘・策略すべてがトップクラスに値する、現代の最高額の賞金首だ。

主に棒術を好むようで、対峙した者のほとんどがその所持を確認している。今回結城が戦ったのも例外ではないというわけだ。

「賞金首にかかってからすでに15年以上経つんだが、大概あっさりやられて大した情報も得られずに逃すらしい。…岩下もそうだろうか？」



安藤の質問に、結城は無言で頷いた。

「捕まえた部下も顔確認しないで、金だけ振込まれたからやっただししいな。……根っからの悪ってわけじゃねえんだよな。依頼内容外で人は殺さないし、物も盗まない。器物損傷すら最低限ってくらいだ」

安藤は一気に話すと一息ついて、そんなところだ、と話を切った。

「ありがとう。後で自分でも調べてみるよ」

浚が礼を言くと、ニツと笑った。

「んなことより、久しぶりなんだから仕事抜きにして話そうぜ。……この後も仕事だから飲めないのが残念だけど」

三人はしばらく、空いた時間を埋めるように話した。少し経つと徐々に結城の体の麻酔が切れてきて、体を起こし腕を動かす程度ならできるようになっていった。

「……と、そろそろ時間か。つい話しちまった」

ふと安藤は壁の時計を見ると、腰をあげた。

「もう行くのか？」

「ああ。俺も入院しないかぎり休めない身分でね」

「そうか。また時間空いたら遊びにこいよ」

少し残念そうに浚は言った。

「おう。浚も、こいつのお守りガンバレよ」

「誰がお守られるか!」「はははっ。じゃ、またな」

背中越しに手を振りながら、安藤は部屋を後にした。

窓の外を見ると輸送ヘリが敷地内に作られたヘリポートに輸送ヘリが降りてきた。

開くと同時に出てきたヘルメットを着けた空軍輸送隊員たちが、建物から出てきた安藤を認めるとその場で敬礼して彼を迎えた。何となしに振り向いた安藤は窓から顔を出した浚たちを見つけると、手を振ってきたのでそのまま手を振り返そうと思ったが、二人揃って敬礼で返すことにした。安藤は笑いながら頷くと、輸送ヘリに乗り

込んでいくのだった。

部屋の扉をノックする音が響いた。結城が応じると、木田が入ってきた。

「木田……」

「結城」

木田は結城のベッドに歩み寄り、じっと結城を見ていた。

その右手が突然上がり、敬礼の格好になった。

「ごくろうだった!」

「…は？」

鳩が豆鉄砲をくらった、という感じに間の抜けた表情で結城は木田を見た。

「き…木田ちゃん? どうしたの、頭でも打った？」

「それはお前に言いたい。それと浚、お前もごくろうだったな」

「は、はあ」

反射的に頭を下げたが、浚にもこの状況が把握できなかった。

木田は二人を交互に見てから、頭を下げた。

「そして…すまなかった」

『……………』

二人が目の前で頭を下げる木田を目を点にして見ているといつの間に開いたのか、扉の方からクスクスと笑い声が聞こえてきた。

「も、相変わらず不器用なんだから」

そう行って歩いてきたのは、タイトスカートが違う意味で似合う、背が低めの女性だった。身長はおよそ155センチ弱。あまりにも小さい。

その小ささで175センチ以上は優にある木田の額をこづく姿は、なかなか愛らしいというものだ。

「だ…誰なんだ？」

こそこそと結城は浚に耳打ちをする。浚も声をひそめて答える。

「結崎結城。『ゆいゆい』のあだ名で呼ばれる、区役所内に潜入してる支部長だ」

「…あゝ、なるほど…木田ちゃんも春なのね」

木田と結崎が話す——もといじゃれあっているのを見ながら呟いた。

「…：ロリコンってことか」

結城の呟きが聞こえたのか、木田は慌ててこちらを向き直すと結城を睨み付けてから口を開いた。

「えゝ、その、なんだ…」

と、思いきや言いにくいのかなかなか切り出してこない。見兼ねた結崎が横から助け船を出した。

「木田司令は、今回の事件の情報について謝っているのよ」

「事件の情報？」

結城が首を傾げて反復すると軽く咳払いをして木田は答えた。

「そうだ。今回の事件は片瀬美佳が鳩派の一派に誘拐された、そう伝えたな？」

「あ、ああ。確かにそう聞いたけど？」

「実は…嘘なんだ。いや、それどころか今回の事件はすべて狂言にすぎない」

「狂言…？」

結城が今度は逆方向に首を傾げて反復する。浚は木田から目を離さずに結城の疑問に答えた。

「ようは作られた事件だったということだ。…：なぜそんなことをしたのか、聞かせてもらえますよね」

木田は浚の質問に逡巡して、重く口を開いた。

「…お前達を試すためだ」

「俺たちを…？ どういうことだよ！」

結城は木田に食って掛かるが、もう十分に腹を決めたのか動じる事無く木田は返す。

「——鷹派が最近活発化しているのは気付いているな」

「ああ。そのくらいはな」

浚は即答する。木田は頷くと続けた。

「鷹派が：内戦を引き起こそうと図っているという情報が、先日入ったんだ」

「……っ!？」

「もうそこまで話が進んでいたか：」

それぞれの反応を聞きながら、木田はさらに続ける。

「内戦が起きたらそれこそ日本は終わりだ。日本の平和は完全に消滅する」

内戦が一度起きれば、その後に続くように次々と自身の欲求を持った者たちがテロを引き起こすだろう。そうなれば、市民が安心して暮らすことのできる国は無いに等しい。

おそらく鷹派の狙いはそこだろう。内戦やテロの頻発化により、人々の戦争意欲を駆り立て、他国との戦争へ発展させる。安易な考えではあるが、足掛かりにはなるだろう。

「それと俺たちに、どういう関係があるんだ」

浚は努めて冷静に尋ねる。木田は一息置いて言った。

「君たちに：対鷹派として参加・及びその小隊を指揮してもらおう」  
木田のその言葉が部屋の空気を重くし、浚と結城にのしかかっていたように思えた。

## FILE 5：重い鎖（後書き）

今回はアクションがメインでした。久しぶりだったので上手く書けているかどうか。かなり不安なところですが、ハイ。上手くイメージできるように描写できていたら幸いかな、と。あと、二人の心情について少々。ネタばれ加減に言うと、二人は小さい頃から防衛庁にいたわけです。なんでかって？ 実力主義だから、以外はまた別の時にでも。とにかく、幼い大切なときを戦争の影と共に暮らした二人は色々と抱えているので、そこも追い追い書こうかなと。これからどんどん暗いものを暴かれていく二人ですが、どうぞしっかりで見守ってください。それでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0836b/>

---

変・人

2010年10月21日01時30分発行